

Thinking about life,
again

静岡大学
公開講座
ブックレット4

いま、再び〈いのち〉を 考える

松田 純+田島靖則+石川憲彦+中井弘和
静岡大学生涯学習教育研究センター(編)

静岡大学生涯学習教育研究センター

いま、再び〈いのち〉を考える

静岡大学生涯学習教育研究センター（編）

趣旨説明

中井弘和

3

報告1 検証 生命操作の現在

松田 純

5

一〇年前に何が語られたか／ヒトゲノム解読完了宣言／遺伝子操作と細胞工学／iPS細胞(induced pluripotent stem cells)…人工多能性幹細胞)の可能性／iPS細胞研究と再生医療の倫理問題／願望実現医療——治療目的以外での薬の使用／結論

報告2 検証 いのちの「はかなさ」を見つめて

——米国の中絶論争に学ぶ——

田島靖則

15

〈いのち〉をめぐる宗教的・社会的現象としての米国の「中絶論争」／米国の「中絶論争」は対岸の火事か？／米国の中絶論争／プロライフ派の主張／プロチョイス派の主張／結論

報告3 検証 現代人に突きつけられた生と死の課題

石川憲彦

27

テイラヌス(Tyrannus)の扉が開いてしまうとき／宗教によって異なる人間観と共通する生命観／工業と生命／自殺死亡率の増大／社会問題の精神・心理化と資本／軽度発達障害とADHDの子どもの増大／人類の未来を左右する脳の領域／ある子どもの最後の言葉

パネルディスカッション

閉講挨拶

佐藤博明

60 43

本書は、静岡大学生涯学習教育研究センターの主催により、以下の要領により行われたシンポジウム「いま、再び〈いのち〉を考える」の記録である。

- ・日時：2010年12月18日（土）13:30～16:30
- ・会場：静岡市産学交流センター（B-nest）

静岡県立大学創立60周年記念公開シンポジウム 「それはいかに実現されたのか？」 概要

<趣旨>

10年前に実施された静岡県立大学開学50周年記念公開講座は、全18回（約1,000日間）に及ぶ実施期間、学外の講演者との対談あるいはシンポジウムなどを取り入れた実施形態、「20世紀とは、何だったか」「21世紀の羅針盤」というテーマの統一性など、従来の公開講座にはない社会へのアピール性に富んだものでした。

その中で多くの提言・提案・予測を行いました。このシンポジウムでは、10年を経過した現在、その後の展開・研究成果の紹介と総括を行い、再び未来への展望を探っていきます。

<内容> ※2010年1月30日（土）～12月18日（土）全6回

回	日時	タイトル	パネリスト
1	1/30 (土)	地球環境をめぐる10年から 未来へ	佐藤 博明（静岡大学元学長） 鈴木 款（静岡大学創造科学技術大学院・理学部教授） 松田 智（静岡大学工学部准教授） 水谷 洋一（静岡大学人文学部准教授）
2	4/24 (土)	今、戦争と平和について 考える	山本 義彦（静岡大学名誉教授） 高橋 洋児（静岡大学名誉教授）
3	6/26 (土)	食えること、生きること ～未来の食と農の姿～	佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所副所長） 川口 由一（農家・自然農提唱者） 中井 弘和（静岡大学名誉教授）
4	8/28 (土)	科学とテクノロジーが辿る道	荒川 紘（静岡大学名誉教授・愛知東邦大学教授） 荒木 信幸（静岡大学名誉教授・静岡理工科大学学長） 天岸 祥光（静岡大学名誉教授） 石川 勝利（静岡大学名誉教授）
5	10/30 (土)	教育・福祉・地域づくり ～よりよく生きるために～	小櫻 義明（静岡大学名誉教授） 角替 弘志（静岡大学名誉教授・常葉学園大学学長） 石井 正春（静岡大学名誉教授）
6	12/18 (土)	いま、再びいのちを 考える	松田 純（静岡大学人文学部教授） 田島 靖則（日本福音ルーテル教会牧師・雪ヶ谷ルーテル幼稚園園長） 石川 憲彦（精神科医）

- ・コーディネーター：中井弘和（静岡大学名誉教授）
- ・会場：静岡市産学交流センター（B-nest）6階プレゼンテーションルーム
- ・参加費：無料

趣旨説明

中井 弘和

師走の土曜の午後にもかかわらず、多くの皆さまにお集まりいただきましたことに、心より感謝申し上げます。今日は、静岡大学六〇周年記念シンポジウムの第六回です。最終回を祝福するように、久しぶりに真つ青な空が広がっております。開けた窓からは、風もこの部屋に入ってきております。

今日お集まりの皆さまが必ずしもこのシンポジウムに毎回出席しておられないことを前提に、このシンポジウムの趣旨をご説明したいと思います。一〇年前、二一世紀に入る前に、三年にわたって一八回のシリーズで静岡大学五〇周年記念の公開講座を行いました。佐藤元学長の時代に催したもので、総勢六〇〇七〇人の教員たちが参加しています。その場で私たちは、二一世紀という新しい時代を夢見、希望を抱きながら議論し、いろいろな提言もさせていただきました。その議論・提言が、この一〇年間でどのように展開され実現されているのか、それを検証しようというの

が今回の六〇周年記念シンポジウムの主な趣旨です。私たち教育・研究に携わる者にとって非常に重要なことは、当然のことながら、自分の言葉や行動に責任を持つということです。あのとき提言した私たち自身が、その後どのように生きてきて、今何をやっているかということも、やはり問われなければならない。そのようなことも含めてこのシンポジウムを企画しましたので、そのような点に焦点を当てながら聴いていただければと思います。

今日で第六回を迎えておりますが、第一回は地球環境、第二回は戦争と平和、第三回は食と農、第四回は科学・テクノロジー、第五回は教育・地域・福祉、そして本日は命がテーマになります。これまでのいずれのテーマにおいても命を視野に入れていることは当然ですが、今回は特に、私たちは命にどう向き合えばいいのかということが課題になるかと思っています。「二一世紀は命の時代」というのが、五〇周年記念のときの総体としての結論であり、願いでもありました。しかし、皮肉といえますか、この五〇周年のシンポジウムが始まるころから、日本人の自殺者数が二万人から急に三万人になり、それから一二年連続で三万人を超えています。一説によりますと、自殺者は年間三万人ですが、自殺未遂者はその一〇倍の三〇万人、自殺願望はそ

のまた一〇倍の三〇〇万人という状況だそうです。いずれにせよ、日本は今、厳しい命の危機に直面していることは確かでしょう。

おります。

今日は、「命」にかかわって社会の第一線で活躍しておられる三人の先生方にパネリストになっていただき、命の問題についていろいろと語っていただきます。まず、日本における生命倫理の第一人者で哲学者の松田先生。NHKのテレビなどにもよく登場されて、発言しておられます。続いて田島先生は、五〇周年記念シンポジウムでは日本福音ルーテル教会小鹿教会の牧師として議論に参加していただきましたが、その後、アメリカに留学されて研究を重ねられ、学位を取って日本に戻られました。九州学院大学で教鞭を執っておられましたが、現在は再び牧師の現場に戻って活躍しておられます。もうお一人の石川先生は、静岡大学の保健管理センターの所長をずっと続けておられました。しかし、かつて自分が診た子どもたちが今どうなっているか、もう一度現場で接したい、あるいは精神科医として、子どもたちだけではなく弱い立場にある人々を現場で支えたいという願いをもって大学を退職され、そういうお仕事をもっと続けておられます。まさに第一線で活躍しておられる先生方にお話ししていただけることを、大変うれしく思っ

検証 生命操作の現在

松田 純

一〇年前に何が語られたか

二〇〇〇年四月二〇日に「生命操作」をテーマにシンポジウムが行われましたが、当時はヒトゲノムの解説が順調に進んでおり、シンポジウムが終わった直後にヒトゲノムの暫定版のドラフトが公表されました。ただ、これは遺伝子の解明ではなく、AGCTという塩基の並びの解説で、その後、遺伝医療が進んで、オーダーメイド医療の時代がやって来るだろう、ひょっとしたら、それが人間改良に発展するかもしれないということが言われました。

他方、そうした形で人工的に生命を操作していくことに対して、自然を守るという立場があり、そこでは特に外部の自然である地球環境をどう守っていくかという、もう一つの大きなテーマが掲げられました。同時に、自然は外に

あるだけではなくて、われわれの内にもあります。われわれの身体自体は自然物です。この内なる自然を human nature（人間的な自然）という言葉で表します。この人間性をどう守るのかということも重要なテーマでした。

人類は文明化によって、自然の拘束から解放されました。すなわち、科学技術が人間を自然から解放したと言えますが、この自然からの解放が、同時に自然あるいは神からの離反になり、それによって科学の発展がなされるわけです。それは一見、宗教から離れていくように見えます。しかし、実は自然は非常に奥深い所ですべてがつながり合っているということが、科学の発展によってむしろ見えてきました。それは大いなる命と再び出会うこと、科学と宗教が再び出会うことです。この意味で、私は一〇年前のシンポジウムで、宗教的直感を再評価致しました。

ヒトゲノム解説完了宣言

さて、その後の展開です。まず二〇〇三年四月、シンポジウムが行われた三年後、ヒトゲノムの完全解説が宣言されました。この完全解説以降、ゲノム科学と遺伝医療は長足の進歩を遂げます。とりわけ、病気と遺伝子との関係の解明が進んできています。その結果、予知医療がキーワードになってきます。現在の医療は、病気になってから医師や病院を訪ね、それを治してもらうという形ですが、これからは遺伝子診断を行って、病気になる前からかかりやすい病気を見つけ、その病気にかからないように予防する、あるいは発症しても軽くなるようにする。こうした予知医療が二一世紀の医療だと言われています。しかも、それを一人一人に合った医療、個の治療 (Personalized medicine) として行っていくことがめざされています。

その一つに、ファーマコゲノミクス (Pharmacogenomics: 薬理ゲノム学) というものがあります。これは Pharmacology (薬理学) と Genomics (ゲノム学) を合体した新しい言葉です。個々の患者における遺伝的特徴の差異を把握して、その遺伝子の特徴に合った最適な薬剤を選択し、最初から最適な用法・用量で投与するというものです。

われわれは病気になる医師から薬を処方されますが、そのとき、この病気ならこういう薬ということがだいたい決まっています。しかし薬の中には、ほとんどの人には副作用しか起こさないが、ある人には非常に効くという薬もあるし、その逆もあります。現在は、これまでの経験と統計値に基づいて処方していますが、これからは遺伝子の型を調べて、飲む前から「これが、この患者にぴったりの薬だ」「この患者にはこれだけの容量」「この人には副作用だけが強く、効果がないからやめておく」という個別的な処方の時代を迎えます。患者の遺伝子の型を検査した上で処方される薬で現在、保険適用されているのは、日本では、塩酸イリノテカンという抗がん剤のみですが、こうした処方がこれから進んでいくと予想されます。

これらの発展の背景に、ゲノム・シーケンサーという、塩基配列を自動で読み取っていく機械の驚異的なスピードアップがあります。ヒトゲノム・プロジェクトは、アメリカが呼び掛けて国際的に行われた壮大な研究プロジェクトでしたが、このために一九九〇年から一三年、約五〇〇億円を要しました。一人の人間のゲノム、例えば私のAGCTの三〇億の塩基配列を全部読み解くのに、一時間で一〇〇ドルという時代が間もなく来るだろうと言

われています。今は一〇〇万円ぐらいかもしれませんが、一万円ぐらいでこれが読み解けるようになるくらい、すさまじい変化が起きています。

遺伝子操作と細胞工学

遺伝子研究だけでなく、細胞研究の展開も一緒に見ていきましょう。まず、一九九八年に米国でES細胞(Embryonic Stem Cells)が作成されました。これは受精卵を破壊して作る万能細胞です。この細胞からは、さまざまな臓器や組織を作ることができます。これについてはいろいろな議論がありました。ついに今年(二〇一〇年一〇月)、米国で人に応用する臨床試験が承認されました。しかし、元となる受精卵というのは子宮の中で育てば人間になるものです。したがって、これは大げさに言えば殺人行為だということで、特にカトリック等から強い反対がありました。受精卵という人間のもとを、細胞工学(セルテクノロジ)の資源として使いますので、「生命の資源化」という批判が出て、世界中で大論争になりました。日本ではあまり論争がないまま、政府の委員会ですごく決まっていきましたが、ヨーロッパなどではかなり激しい議論がありました。米国

でも共和党のタカ派は生命擁護という立場なので、ブッシュ前大統領はES細胞研究に対して連邦の予算を出さないという立場を貫きました。

そうこうするうちに、二〇〇七年一月に京都大学の山中先生がiPS細胞を開発しました。これは世界中で大ニュースになったので、みなさまもよくご存じだと思います。これは、受精卵を使わず、例えば皮膚細胞に特殊な遺伝子四つ(山中ファクターと呼ばれる)を導入することによって細胞を初期化する手法です。われわれの体は、たった一個の受精卵が分裂して、体のさまざまな部分に分化してきたものです。いったん分化すると、もうほかのものにはならないという性質があるのですが、その時間を逆戻りさせるような操作をして、受精卵に近いところまで持っていく、さまざまな組織や臓器を形成するという技術開発が山中先生の手でなされました。受精卵を使用しないという意味で、ES細胞が持っていた倫理問題をクリアすることになりました。それをカトリック教会は大歓迎し、二〇〇八年一月にバチカンの生命科学アカデミー会長は、山中先生の偉業を歴史的な成果とたたえました。

iPS細胞 (induced pluripotent stem cells : 人工多能性幹細胞) の可能性

iPS細胞のメリットは、ここから幹細胞 (Stem Cell) を作り、そこからさまざまな組織・臓器を形成し、それを医療に応用できることです。例えば交通事故で骨髄損傷し、車いすの生活をしている方に神経幹細胞などを導入して回復を図ることが期待されます。これはまだ人に対する臨床応用がされていませんが、再生医療として、アルツハイマー病、筋萎縮性側索硬化症 (ALS)、パーキンソン病等々の難病に治療の可能性が広がるという期待があります。

私は、再生医療は生体に優しいスマートな医療で、二一世紀の医療の中心になるべきものだろうと思っています。現在の医療は病気になったら薬で治し、薬で治らないものは手術などで治すわけですが、これからは、心筋梗塞などによっていたんだ部分に幹細胞のシートを貼り付ければ、そこから新しい細胞が発達して病変部がもとに戻り、病気が治癒するという時代が来ると期待できます。胸を開けて心臓を取り替える必要はなくなり、小さな穴を開けて内視鏡で細胞シートをペタペタとシールを貼るようにして移植

して、心臓疾患を治すというような、非常にスマートな医療が可能になります。しかも、もともとは自分の体細胞から作ったものですから、拒絶反応もありません。もしこれが実現すれば、医療はからだに元々そなわっている自然治癒力をサポートするという意味で、本当の医療が始まるのではないかと期待があります。

現在は、患者自身の幹細胞を移植する臨床応用がされていますが、iPS細胞から作製した細胞の移植の臨床応用はまだです。いまiPS細胞を用いて実際に行われているのは、病態の解明や創薬です。病気がどのようなメカニズムで起こるのか、あるいはそれを治す薬をどう開発するかというときに、今までは動物実験で研究や実験を行ってきましたが、iPS細胞から人の細胞を作って実験すれば、直接その効果を確かめることができます。現在では、新薬の候補になった場合、人を対象とした臨床試験に入る前に、動物を用いた何段階にもわたる実験を徹底的に行います。それをクリアしたものが初めて臨床応用の段階にのぼってきます。しかし、動物と人間とはやはり種が違うので、動物実験というのは仕方がないからやっているものであって、科学的には正しいやり方ではありません。人の細胞でやるのが一番確かなのです。それをiPS細胞でやれば、動物

を犠牲にしなくてもよいし、よりの確な判断ができるようになります。薬の開発のスピードアップとコストダウンにつながります。すでに日本ではベンチャー企業がこのようなビジネスを開始しています。例えば、心臓と肝臓はかなり薬の影響を受ける部分なので、iPS細胞を使って心筋細胞や肝細胞を作り、それで実験をするということがなされています。病気の解明についても、人体の中で起こっているメカニズムは直接目で見れませんが、例えばALS患者のiPS細胞からALSの病気を持った細胞を作って、それを顕微鏡下で見て、神経細胞が壊れていく過程を直接観察することが実際に行われています。

iPS細胞研究と再生医療の倫理問題

では、iPS細胞には倫理問題はないのかというと、実はいろいろな問題があります。iPS細胞から精子や卵子を作ることのできるため、それを合体させて人間を誕生させることも可能になります。これは不妊治療の一環として、慶應大学で研究されています。不妊治療に役立つのは許されるかもしれませんが、例えば私は男なので普通は精子しかできませんが、私の体からiPS細胞を作れば、卵子も

作ることができるのです。そうすると、自分の子どもを一人で作ることができるのです。その子はクローンではありませんが、クローンと似たような状況とも言えます。通常の有性生殖を経ずに子を成すことができます。女性なら自分で子どもを産むことができるかもしれませんが、男性から精子と卵を取って代理出産で子どもを産んでもらうこともできるでしょう。アメリカなどでは、他人に産んでもらって子どもを育てている同性愛者が大勢いますが、男性同性愛者のiPS細胞からそれぞれ精子・卵子を作成して、代理出産で二人の愛の結晶を作ることも可能になるわけです。これは、同性婚の社会的な問題とも関連してきます。こうなってくると、人間の誕生に対して社会に戸惑いと混乱が生じるのではないかという懸念が出ています。さらには、人間と豚の合いの子、キメラの作成なども可能になってきます。こうしたことが倫理的に許されるのかという問題があります。

さらに、iPS細胞に限らず幹細胞を用いた再生医療は、病気の治療だけではなく、美容やアンチエイジング、肌の若返りや豊胸手術にも使うことができます。それがさらに進めば、不老不死への夢に近づくかもしれない。再生医療全般は、医療に革命をもたらす夢の技術であると同時に、

人体改造という問題をもはらんでいるのです。

こうした生命操作の先端として、二〇一〇年五月、人工生命の作製というニュースが流れました。アメリカの研究機関が、まさに人工的に細菌を作ったというのです。作製したのはベクター (Vector) という、ヒトゲノムを民間の立場でいち早く解説した人物です。彼の研究所が一〇〇万个の塩基対で自己増殖する細菌を作りました。これには、例えば、石油を作る細菌を作って今のエネルギー問題を解決しようとか、新しいワクチンを合成しようといったポジティブな狙いもありますが、反対に、地球上に存在しない危険な生物を作り出す可能性もあり、新たなバイオテロの危険性も指摘されています。いずれにしても、合成生物学という新しい領域の登場により、生命とは人間が人工的に作れないものだという常識が崩れてきました。これは「いのちというのは畏れ多いものだ」という生命観を揺るがすものとなっています。

願望実現医療——治療目的以外での薬の使用

医療や医学は、本来、病気の治療を目標としています。ところが、病気の治療ではないところに医学を用いること

が、多様な領域で広がってきています。このようなものを「願望実現医療」という言葉で捉えてみたいと思います。ここでは、治療目的以外での薬の使用、出産のコントロール、安楽死という三つをご紹介します。

①治療目的以外での薬の使用

まず、治療目的以外の薬の使用については、ドーピングが有名です。オリンピック選手やアメリカの大リーガーの使用はいろいろニュースでご存じでしょうから、ここでは、趣味のスポーツにもドーピング汚染が広がっているということを紹介します。日本はどうかよく分かりませんが、例えば、ドイツではフィットネスクラブの利用が非常に盛んで、最近の調査では、クラブの数は六〇〇〇を超え、会員数が約六〇〇万人だそうです（ドイツの人口は約八一七五万人）。そのうち七〇万人が筋肉増強剤などのドーピング薬に手を出している。年齢は一三歳からだというフィットネスクラブ協会の調査結果があります。

これらは主に身体に対するドーピングですが、精神的なドーピングもあります。スマートドラッグと言われる、気分明瞭剤として、うつではない人が気分を明るくするために抗うつ薬を用いるというような使い方です。米国での

調査では、二八〇〇万人がSSRI (Selective Serotonin Reuptake Inhibitors) という抗うつ薬 (商品名: プロザックなど) を常用しているという統計があります。また、月経前の不快な症状を緩和するためや、「絶対に憂鬱になつたり疲れたり落ち込んだりしたくない」というだけの理由で、抗うつ薬を服用する。あるいはドイツでも、健康人のための抗うつ薬が二〇〇六年だけで四八〇万パック販売されているという状況があります。

こうした使用は「こころの美容 (美容薬理学)」と呼ばれています。例えば、リタリンという薬は注意欠陥多動性障害 (ADHD) の標準治療薬として、米国の一八歳未満の子どもの五〜六%に処方されています。リタリンは健康な者が服用すると集中力が高まる効果がありますので、それを目的とした服用も行われています。米国の小学校で、児童が登校してくると、まず担任の先生がリタリンを一錠ずつ配り、学級を正常化してから授業を始めるという状況があるようですが、それはいかがなものかと思えます。このような利用が広がっていますので、過去一五年間でリタリンの製造量は一七倍、アデラル (アンフェタミン) は三〇倍となり、製薬会社の大きな収益にもなっています。

また、米国の大学生の四〜七%が、試験準備のために一

度はリタリンを服用したことがあると答えています。日本でもリタリンの乱用が問題になり、二〇〇七年に製造元がうつ病への効能効果を取り下げたという事件がありました。

こうしたことは学者の世界にも広がっており、有名な科学雑誌『ネイチャー』が二〇〇八年一月に一四〇〇人の読者にアンケートを行ったところ、興奮作用のある薬などを集中力を高める目的などで使用したことがあると答えた人が五人に一人いました。また、モダフィニルは眠気を覚ますための薬ですが、科学者が国際会議などで海外に行く際の時差だけ解消のため、あるいは徹夜で論文を書き上げるために使われているようです。ちなみに、入手方法はインターネットや薬局、さらには、医師の処方もあります。

「バイアグラ現象」というものも起こっています。バイアグラはもともと狭心症治療薬のシルデナフィルとして開発が進められていましたが、臨床試験の結果、この効果を証明できず、その面ではあきらめました。しかし、臨床試験の報告書を読むうちに、製薬会社はある共通の現象に気が付きました。そこで、効能・効果を変えて勃起不全治療薬として、ファイザー製薬が臨床試験をやり直し、発売にこぎつけました。売り出されるや、いきなり大ヒットして、初年度には一〇億ドルの収益を上げました。日本でも申請

のわずか五カ月後に異例のスピードで承認されています。ただし、保険は不適用です。

バイアグラは非常に画期的な医療的発明だと言われていますが、同時にそれは米国および世界の性文化を変えたと言われています。しかも、商業的にはインターネット販売された初めての医療用医薬品でもあります。

性機能障害は、心因性が九〇%で、身体・器質性が一〇%というのがこれまでの考え方で、「夫婦間のコミュニケーションを密にして、改善したらどうですか」というカウンセラーの忠告を受けるのが一般的な対策でした。しかしバイアグラ以降は、性機能障害はもはや心の問題ではなく器質性の問題だと捉えられるようになり、バイアグラを飲めば治るという発想になりました。

このように、バイアグラという商標は、勃起不全（ED）という病名の創設とセットで販売されました。EDは製薬企業と専門医師、特に泌尿器科医たちによって作られた病気と言ってもよいかもしれません。発売元であるファイザー製薬は、二〇〇一年に「EDは米国男性の三〇〇〇万人がある程度患っている」と言っています。そのようなことを言われたら、男はみんな不安になってきます。このような形で製薬会社が男としての基準を示し、正常な男、正常な

女、正常なセックス、男らしさ、女らしさというアイデンティティを定義する時代になっています。ちなみに現在は、女性用バイアグラも開発途中にあるそうです。

② 出産のコントロール

出産のコントロールでも、避妊のための医療行為が行われるようになっていきます。しかし、これは到底、病氣治療とは言えません。他方、子どもを持つための医療は、医療ではありますが、治療と言えるのかどうか。さらに、子どもが欲しいというのではなく、どのような子どもを持つかということまで受精段階で選べるようになり、性別の選択まで行われています。それは、病氣を持つ子を回避するという人工妊娠中絶につながるのではないか。これは、田島先生のお話に出てくると思います。

こうしたことは、全体としてライフプランに合わせて最も都合な状態を作ることを狙っていると思います。一つだけ例を挙げると、帝王切開は前置胎盤などの異常妊娠に対して医学的な適応があるものですが、現在、米国の産婦の三人に一人は帝王切開で産んでいます。これほど医学的適応があるとは考えられません。産む側としては、陣痛を避けたいという願望や、早く産んでバカンスに行きたいと

結論

いったスケジュール的なことがあるでしょうし、取り上げる産科の側のスケジュールもあるでしょう。そのような生活の都合に合わせたものとして、帝王切開がここまで広がっている。本来は難産などに対する治療手段として医学的適応があったものを、願望実現のために用いる形になっています。

③安楽死

安楽死の問題も治療とはいいたいわけですが、医療として行われています。これも願望実現医療ではないでしょうか。

このように、医療の本義を外れた願望実現医療はさまざまな分野で広がっています。それを定義すると、「医学の知と力を病苦から逃れるために用いるのではなく、自分が生きたいと望む生の方へ、自身の身体構成をできるだけ近づけ合わせようとするための医療」ということになります。このような願望実現医療の拡大という事態を、われわれは目の当たりにしています。

この一〇年間で、生命操作の技術的可能性は非常に拡大し、願望実現医療が隆盛となりました。これらの動きに違和感を抱くことは多いわけですが、よく聞かれる理由として、「自然のままが一番よい」「こうした人工的な操作は不自然だ」というのがあります。ですが、われわれは決して自然のままには生きていません。服を着ていること自体、もう自然ではないのです。文明の殻に守られて、私たちは生きています。「同性愛は、自然に反するから道徳に反する」という表現がありますが、これは自然に反することはイコール道徳に反することだ、悪いものは悪いという同語反復をして拒否感を強めているだけで、理由は何も説明していません。自然のままがよいというのではなく、どこまでが「自然」として受け入れるのか、人間の自然らしさをどこまで残すのかということを、われわれは人為的に判断しなければならぬのです。それが倫理的な判断なのです。

実際に、遺伝子組み換え動物、植物、人工生物が地球の生命圏にばらまかれる時代が、いま目の前に来ています。これが環境に対してどのような影響を与えるのか。地球の

自然の同一性をどう守るのか。そして、われわれの自身の内にある人間性 (human nature) の同一性をどう守るのか。これがいま問われています。それは自然のままがよいというのではなくて、なぜよいのか、どこまで自然らしさを残すべきなのか。そうした点での国民的な対話と合意形成が必要であり、その先に必要であれば立法化という政策が必要になってくるだろうと考えます。

検証 いのちの「はかなさ」を見つめて

——米国の中絶論争に学ぶ——

田島 靖則

私は一〇年前にこの静大の五〇周年のシンポジウムに呼びいただいた後、熊本にあるキリスト教の大学の教員になり、そこでキリスト教関係の科目と社会福祉関係の科目を教えていました。その中で、四年前に招聘を受け、今は東京大田区にある教会の牧師と付属幼稚園の園長をしています。一〇年前は「科学と宗教の対話」についてお話しさせていただきました。結論から言うと、それはまったく進んでいないのですが、科学と宗教をどこでどう切り結ぶのかという一番分かりやすいサンプルが、アメリカの中絶論争だと思えますので、今回はそのことについて考えたいと思います。なお、本日は哲学者の松田先生、医学者の石川先生とご一緒なので、私は宗教者としての視点でお話を進めたいと思います。

〈いのち〉をめぐる宗教的・社会的現象としての米国の「中絶論争」

米国の大統領選では、中絶に関する論争がしばしば起ります。すなわち、共和党の候補者と民主党の候補者のどちらが大統領になるかによって、アメリカの生命倫理についての方向性が変わってくるということです。アメリカでは、人工妊娠中絶の問題は極めて政治的な問題であり、社会的な問題でもあるのです。

図1は、デモンストレーションの写真です。アメリカでは、人口妊娠中絶・絶対反対の人たちをプロライフ（Pro-Life）派と呼びます。それに対し、人工妊娠中絶をきちんと法制化して引き続き容認していききたいと思う人たちをプロチョイス（Pro-Choice）派と呼びます。この写真には赤

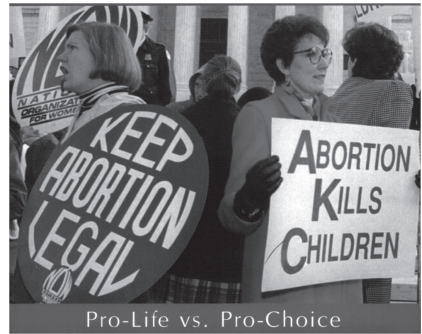


図1 中絶論争のデモンストレーション

い服を着た女性と、青い看板を持った女性が写っていますが、青い看板の方には「Keep Abortion Legal」と書いてあります。こちらがプロチョイスです。赤い服を着ている方の女性は「Abortion Kills Children」と言ってお

り、こちらがプロライフです。人工妊娠中絶は子どもを殺す、非常に過激にも聞こえる主張ですが、実は極めて宗教的な価値観に基づいて、このプロライフとプロチョイスの主張がなされているのが特徴です。特にプロライフの人たちの主張は、アメリカではキリスト教の価値観と固く結び合っています。ブッシュ前大統領はプロライフ寄りで、人工妊娠中絶絶対反対の人たちが支持していたのですが、新しい民主党のオバマ大統領はどちらかというとリベラルですから、プロチョイスの方が強くなっています。

プロライフ対プロチョイスは、いろいろな言葉に置き換えて考えることができます(表1)。中絶反対派のプロライ

フは生命優先主義で、中絶容認派のプロチョイスは選択の自由優先主義です。それから、プロライフは胎児の人権を、プロチョイスは母親の人権を唱えています。

表1 プロライフ対プロチョイス

Pro-Life	vs.	Pro-Choice
プロライフ 中絶反対派	対	プロチョイス 中絶容認派
生命優先主義	対	選択の自由優先主義
胎児の人権	対	母親の人権
理想主義	対	現実主義
共和党	対	民主党
宗教	対	科学
Sanctity of Life 生命の尊厳を優先	対	Quality of Life 生命の質を優先
生命=人格	対	生命≠人格
保守キリスト教	対	自由主義キリスト教

また、理想主義のプロライフに対して、現実主義のプロチョイス。政党で言えば、大雑把に言って、共和党対民主党となります。もちろん共和党の中でもプロライフ寄りの人、民主党の中でもプロライフ寄りの人もいますが、だいたいそれぞれの党を代表する意見は、共和党≪プロライフ、民主党≫プロチョイスと分かれるのです。また、これは厳密ではありませんが、宗教対科学だというように大雑把に割り切って説明をすることもあります。プロチョイスを押している人たちの多くはキリスト教徒ですから、そ

う簡単に宗教対科学とも言い切れない部分もありますが、宗教的価値を重んじているプロライフと、機械論的な科学というか、科学の進歩に身を委ねていこうと考えるキリスト教徒たちが押しているプロチョイスとも分けることができます。

社会福祉の分野ではよく聞かれるQOL (Quality of Life) とは「生命の質」という意味ですが、プロライフはこの Quality of Life ではなく Sanctity of Life を主張しています。つまり、プロチョイスの人たちは生命の質が重要だと主張し、プロライフの人たちは生命の尊厳がすべてに優先されると主張するのです。また、プロライフ(中絶反対派)の人たちは、生命⇨人格であるという生命観・人間観を持っています。つまり、先ほどの松田先生の話にあった受精卵や胎児をどう見るかということです。プロライフの人たちは生命⇨人格ととらえるため、中絶は絶対に許せないということになる。ところが、プロチョイスの人たちは、生命⇨人格とは言えない、人格とイコールでない生命もあるという見方をします。ですから、キリスト教の中でもプロライフの保守キリスト教と、プロチョイスの自由主義キリスト教と二つに分かれるのです。

米国の「中絶論争」は対岸の火事か？

この米国の中絶論争は、日本から見ると何をやっているのだろうという感じがするかもしれません。日本では人工妊娠中絶など、「今どき何？」という感じでしよう。先ほどの松田先生の発表を聞いてみると、非常にアナクロ(時代錯誤)な話題だということにもなってしまいます。人工妊娠中絶など、今はもう生命科学の問題でも何でもない、もっともっと先まで行っています。しかし、アメリカで大統領選のたびに中絶論争が巻き起こるのはなぜなのか。それは対岸の火事で、私たちとは関係ないことと見ていいのか。私は、本当は日本でも中絶の是非が話題になってもいいのではないかと思っています。

一九九七年に、「酒鬼薔薇聖斗」の神戸連続児童殺傷事件が起こりました。その後、文科省は慌てふためいて、命を大切にする教育をしようといういろんな手を打ってきたはず。しかし、命を大切にする教育は成果を上げたのでしょうか。昨今のニュースを見ると、成果を上げたとは到底思えません。私は今、東京の大田区にいますが、朝、ラジオやテレビの交通情報を聞いていると、毎朝と言ってもいいほど「〇〇駅で人身事故が発生したため、山の手線

の電車が止まっています」というニュースが流れてきます。その人身事故の中身は、大抵が自死（自殺）です。毎日そのようなことを聞かされていると、みんなだんだん何とも思わなくなってしまうのです。「山の手線が止まっているなら私鉄で行こう」「地下鉄で迂回しよう」ということぐらいしか考えない、これが今の現実です。それから、つい昨日でしたか、取手で無差別殺傷事件が起きました。誰も殺されなかったから良かったとも思いますが、ナイフを振り回して誰でもいいから刺してしまおうとした事件は、「また起こったのか」という感じです。これほど、命を大切にする教育は実っていません。あるいは、小学生・中学生が最近また次々と自らの命を絶っています。

このような現実を、私たちはどう見たらいいのでしょうか。命は大切だということは、学校の先生は口を酸っぱくして言ってきているはずですが、しかし、その当たり前のこととして語られていることが、上滑りで説得力に欠けるということを子どもたちは見抜いてしまっているのです。命は大切と言いながら、実は命が大切にされていない現実を子どもたちは知っているから、自らの命を絶つという選択肢が出てくるのです。毎日、鉄道事故が起こって、毎日、どこかで電車が止まっている。実際には命を大切にしない

社会に自分たちは生きているのだということを、子どもたちは敏感に感じ取ってしまっています。だから、命を大切にする教育と言っても、そのようなものはほとんど絵に描いたもちで、心の中に染み通っていくわけがありません。

米国と日本では、確かに文化がまったく違います。しかし、命をめぐる問題で、大の大人が口角泡を飛ばして議論する姿というのは、日本にはまったくないのです。アメリカにはあります。それが、日本人である私たちから見ると滑稽に見える、大統領選挙のときの中絶論争なのです。それは、命をめぐる問題で大人が大げんかしているという様子です。アメリカの子どもたちは、少なくともそれを見ています。ここが日本とアメリカの大きな違いだろうと私は思うのです。ですから、「今さら、中絶論争？」と思われるかもしれませんが、もう一度、これを振り返ってみたいと思います。

米国の中絶論争

アメリカでも、一八六五～一九七〇年は中絶が非法とされていました。今聞くと本当にびっくりするようなことですが、すべての州で非法だったのです。そのために素人の手による中絶行為が秘密裏に横行し、多くの女性が犠

性になって命を落としたという事実があります。そこで一九七〇年、アメリカでかの有名なロウ対ウエイド判決が出されます。これは、テキサス州ダラス在住だった独身女性

所が提示した生存可能性確立の時期が、妊娠二四〜二八週でした。

性のジェーン・ロウ（仮名）が、当時すべての中絶を禁じていたテキサス州法が違憲だとして、有能な資格者である医師の手によって、安全に、しかも医療設備の整った病院で、合法的に中絶手術を受ける権利を主張したのです。実は、彼女は当時妊娠中だったそうです。そして裁判所は、米国における全面的な中絶禁止は憲法の定めるプライバシー権行使の不当な制限に当たると判断したわけです。プライバシー権というのが非常にアメリカらしいところで、「それは個人が決定する問題でしょう」ということです。それで中絶禁止は違憲ということになったわけです。ただしその際、妊娠の中断については女性の権利が無制限に認められたわけではなく、連邦最高裁は胎児の人権についての妊娠期間の三期説（Trimester System）を提示しました。そこで一番問題になったのは、胎児の母体外における生存可能性（Viability）です。つまり、胎児が母親のおなかから出て

それに対する人工妊娠中絶絶対反対のプロライフ派の立場はどうだったか。実はアメリカでは、政治的にはカトリック教会はそれほど大きな力を持っていないのです。アメリカはプロテスタントによって建国された国ですので、今でも政治的に、あるいは経済的にと言ってもいいのかもしれませんが、大きな影響力を持つのはプロテスタントの人たちです。

生えられるのは、どのぐらいからかということです。胎児の人格あるいは人権の確立は、その生存可能性の確立とともに発生するという判断でした。そのときに具体的に裁判

話が横道に逸れますが、ローマ・カトリック教会が一九八七年に公表した「生命の始まりに関する教書（教皇庁教理省公表）」というものがあります。これは今、ローマ教皇になっているベネディクト16世が、まだ教皇になる前、教皇庁教理省長官時代に手掛けた文章です。もちろん今もこの文書は生きています。その第一章で、「人間はその存在の最初の瞬間から、人間として尊重されるべきである」と宣言されています。一九六〇年代には、第二バチカン公会議というローマ・カトリック教会の非常に大きな会議があったのですが、その決定の中に「現代世界憲章」というのがあり、その中に次のような文章があります。「生命は受胎されたときから、最高の配慮をもって守られなければならない

い。人工中絶や赤子殺しは最も恐ろしい犯罪である」。キリスト教の教義学的には「靈魂の即時賦与」という言い方をしますが、精子・卵子が遭遇して受精卵になった瞬間に魂が与えられるということです。つまり、宗教的な意味では、靈魂がそこで与えられるという考え方です。

これはキリスト教倫理の中でも主要な議論の一つになるところで、人格の獲得時期はいつなのか。先ほど、生存可能性ということも出てきましたが、そのようなものはローマ・カトリック教会では関係ありません。靈魂の即時賦与なのですから、人間となるのは受精の瞬間です。ですから、プロライフ派の最右翼の人たちは、生存可能性の議論にも組みしないのです。プロライフ派は、米国の中では共和党支持のプロテスタントの保守的な人たちが、その中心的な役割を果たしています。しかし、そのキリスト教倫理などの倫理的な主張は、ローマ・カトリック教会とまったく同じなのです。これは珍しいことで、アメリカではカトリックとプロテスタントは水と油のようなところもあるのですが、中絶反対については完全にタッグを組んでいるのです。

プロライフ派の主張

プロライフ派の人たちの主張については、プロライフの牧師や神父の人たちの説教集がアメリカで出版されています。その一部を私が訳してみましたので、紹介します。まず、「プロチョイスの語彙は、子宮を一掃する、妊娠の終局、生まれる前の子どもを胎児と呼ぶこと、廃棄物、パラサイト、懐胎の産物、原形質の塊、人間になる前の組織体などの婉曲語法に満ちている」。つまり、そのような言い方はすべてまやかしたと言うわけです。英語では、生まれてくる前の胎児は *fetus* で、普通は *baby* とは言いません。しかし、*fetus* という言い方をするこ自体がまやかしており、赤ちゃんは受精卵の段階から *baby* と呼ばれるべきだという主張です。そこに人格を持った、人権を持った存在が発生しているのだからというわけです。

それから、「われわれの命はわれわれ自身の所有ではない」。これはキリスト教的な一つの主張です。つまり、神様からの預かりものである。日本でも、昔は授かりものという言い方をしたようです。それから、マザー・テレサの言葉で、「もしあなたに子どもが要らないなら、私にください。私は要ります」というものもあります。

「もし女性には中絶を選ぶ権利があると言うのなら、胎児の父親には何の権利もないということになる」。これは父権の復権ということを考える人たちの一つの主張でもあります。アメリカのキリスト教の保守派は概して父権主義的です。このような視点から批判することもあるのです。

「胎児は厳密な意味で人間と言えるのかという問いは間違っており、むしろ、どうしたらわれわれ教会は困難な妊娠によって中絶を考えざるを得ない女性や少年や、その家族の隣人となることができるかという問いこそ正しいのだ」という主張もあります。

「胎児、昏睡状態の人、認知症の人、老衰状態の人などに、選択の自由がないことは明らかではないか」という批判もあります。

「中絶をめぐる論争は、この宇宙には目的と意味があるという主張と、この宇宙にはカオス (Chaos) のみがあるという主張との衝突である」。キリスト教徒の信仰を持っている人たちは、宇宙には目的と意味があると考えのです。進化論を容認する人たちも、その進化にはその目的と意味にかなった動きがあると考えます。

最後に、「家族計画が出現した五〇年代に、女性の母性に疑問を投げ掛けられるようになった。六〇年代には中絶の

権利が主張された。七〇年代には中絶が合法化され、母性は人生の選択肢の一つになった。そして今日、母性というものは単なる趣味ということになってしまった」。これは痛烈な皮肉です。

プロチョイス派の主張

一方で、プロチョイス派の人たちの主張はどうなっているか。米国の厚生労働省に相当する機関、Department of Health and Human services のゲイリー・クラム (Gary Crum) が、プロチョイス派が人工中絶容認のために掲げる理由を八点に分類してまとめています。

- ① 中絶は結果的に社会福祉政策のコスト削減につながる。
- ② 中絶は被虐待児童の数を減らし、苦しみを減少させる。
- ③ 中絶は貧困家庭の数を減らし、苦しみを減少させる。
- ④ 妊娠によって死の危機に瀕している女性から胎児を取り出して妊娠を中止することが許されるなら、中絶もまた許されるべきである。(現実には、これは許されるわけです。日本でも母体優先です。妊娠中に母体が危機に陥ったときには中絶して母体を助けるというのが、

優先順位とされています)

⑤強姦の犠牲となって妊娠した女性から、不必要な苦しみを取り除くために中絶は容認される。

⑥近親相姦の犠牲となった女性から、不必要な苦しみを取り除き、遺伝的家族的混乱を避けるために中絶は容認される。

⑦胎児が障害を持つて産まれることが予想される場合、母親の心理的健康を損ない、家族に緊張関係が生まれ、子どもの低質な生活が予想されるならば、中絶は容認されるべきである。(これは Quality of Life の話です。生命の質が担保されないのなら、中絶は選択肢に入っているという主張です)

⑧母親が子どもの性別を選びたいと望む場合、あるいは胎児の身体組織が病気に悩む人々の苦しみを取り除くために必要とされるような場合、中絶は容認されるべきである。(ここで言われていることは、中絶胎児の臓器移植利用など、そのようなことです)

先ほどローマ・カトリック教会のことを言いましたが、それが中絶反対のプロライフの最右翼だとすると、キリスト教の立場での最左翼もあります。それが産児選択宗教連

合 (The Religious Coalition for Reproductive Choice : R CRC) です。そのモットーは "Pro-Faith, Pro-Family, Pro-Choice" で、「われわれは信仰におけるプロチョイスである。祈りの姿勢のプロチョイスである。中絶は道徳的、倫理的、宗教的な責任ある決断であり得る」という主張です。この R CRC という最左翼の人たちは、六つのテーマを掲げています。

①神が与えた性と出産にまつわる絶対的自由には、中絶の権利も含まれている。

②孤立する女性たちや一〇代の少年たちは、それぞれが道徳的主権的存在である。

③出生前の人命の道徳的位置付けが卑小化されるのは当然だ。

④産児調整として中絶は正当である。

⑤中絶は神聖なものである。

⑥聖書において立証されるプロチョイスの神は、すべての選択を祝福するはずである。

結語

私は福音ルーテル教会 (The Evangelical Lutheran Church) の牧師です。これは、プロテスタントのルター派の教会です。世界的に見れば、ローマ・カトリック教会が一番大きいのですが、プロテスタントの中で一番大きいのが、マルティン・ルターの宗教改革でできたルター派、つまりルーテル教会です。福音ルーテル教会は、アメリカの中でも中産階級の人たちの教会です。ですから、アメリカの世論の中ではだいたい、中立中道なのです。そのアメリカの福音ルーテル教会が一九九一年に出した声明を参考までにご紹介します。

中絶についての社会的声明。子宮内で成長しつつある命は、生まれ出るための絶対的権利を持つわけではない。同様に妊娠中の女性も、妊娠を中断するための絶対的権利を持つわけではない。女性と女性の子宮内で成長しつつある命の両者への関心は、共通の生命への責任として表明される。われわれは、神が命の創造主であると信じる。故に数多く行われている中絶行為は、本教会にとって深い憂慮の源となっている。われ

われは神が作られた命が失われることを悼む。キリスト者として強く望まれることは、命を守り保つことである。中絶は、ただ選択の最終手段としてのみ、あるべきである。

最終的には中絶容認の立場ですが、それは必要悪としてだけ認められるのだという主張です。

さあ、人間はいつ人格を獲得するのか。先ほどの生存可能性の確立ということも関係していますが、そこには実はいろいろな説があり、いろいろな生命倫理学者がいろいろな立場を表明しています。しかし、決定打はなかなかないと思うのです。例えば、人間にとって最も大事なのは脳だと思ふ人にとっては、胎児の脳幹が形成される時期ということになるでしょうが、果たして脳が人間にとってのすべてなのかというと、そうとも言い切れないのではないかと。人間は、いつ人間になるのか。生命主義やプロライフの優れた点は、立場上弱者と目される存在の権利を保障できることです。しかし、その生命主義、プロライフの主張が、あたかも機械論的・決定論的に例外なく主張されると大変なことになります。つまり私たちは、キリスト教的には神の委託に忠実であろうとする自由意志は認められているわ

けです。しかし、妊娠したら出産しないと違法だということになると、その人間の自由意志そのものが無意味だということになりかねません。

二〇世紀の古い時代には、機械論か生氣論かという生氣論論争があり、それは圧倒的に機械論側の勝利に終わっています。しかし、その生氣論、例えば「私たちの命には目的がある。私たちが生きていることには意味がある。目標に向かって私たちは生きている」という考え方がどんどん省かれていってしまったために、結局は命の軽視が起ってきていると言えるのではないかと思うのです。現実的には、現在のわれわれに決定的に欠けているのは、人命尊重の倫理や道徳的規範ではないと私は思います。だから、いくら教育の中で命を大切にする教育などと言っても、上滑りで効果がないのです。では何が欠けているのかといえば、例えば中絶の問題なら、中絶を選ぼうとする人たちに実現可能なほかの選択肢を用意するための努力です。まったくしていないと言うと言いつきかもしれませんが、熊本のカトリック教会の病院では、例の赤ちゃんポストを作りました。しかし、あれはカトリック教会が中絶絶対反対を主張するための一つの根拠でもあります。つまり、「私たちは受け皿を用意しました。だから産んでください。育てら

れないのなら、赤ちゃんポストに入れてください」というのが、あの赤ちゃんポストの出現の経緯です。苦渋の選択をなさうとする女性と生まれ出ようとする胎児、その両者の隣人となるということは、どのようなことか。しかし、その両者の隣人となるのが最終目標で、そこにたどり着くまでのプロセスは、いろいろあるのではないかとこのことで、私は米国福音ルーテル教会のあの声明を支持しています。

今の社会は、命の価値を、生産性や効率性で計る社会です。「命は地球より重い」などという言葉は、一九七〇年代かにダッカ・ハイジャック事件が起こったときの福田首相が発した言葉として有名です。しかし、今は「命は地球より重い」と言うだけの社会です。実際には、多くの命が失われていることに手をこまねいて見ている社会です。自死の問題もそうだし、毎日山手線が止まる問題もそうなのです。今は私も幼稚園の園長という形で幼児教育に携わっているのですが、現実には命が大切にされているということを子どもたちに見せる社会にならなければ、命を大切にするということが、子どもたちの心の中にきちんと染み込むことはないだろうと考えています。だから、私たちは滑稽に見えても議論しなければいけない。人工妊娠中絶についても議論し

なければいけないし、死刑制度についても議論するべきだ
と思っています。

検証 現代人に突きつけられた生と死の課題

石川 憲彦

ティラヌス (Tyrannus) の扉が開いてしまうとき

私は、静岡大学を離れて六年になります。一〇年前、佐

藤先生と一緒に第一回のこの講座に出させていた দিয়ে、佐藤先生が「ティラヌスの扉が開いてしまうとき」ということから話されたのを、とても印象深く覚えています。私自身は小児科医として一四年臨床を行ってきましたが、その後は今まで二十数年間、精神科の医者として臨床活動をしています。その間に静大で、いろいろな学生の方と出会いました。遺伝子や染色体に関係した時期もありますので、臨床という立場から、松田先生のお話と少し絡みたいと思います。

松田先生が「裸の人間が着物を着た瞬間から、もう自然ではない」とおっしゃったことは、そのとおりだと思います

ます。しかし、私は臨床家として「人間がどれだけ着物を着て強い存在になろうとも、一皮着物をむけば真っ裸だ」という点を強調しようと思います。

医者は、着物を脱いだ裸の人間と付き合っています。今付き合っている一五歳までの子どもたちは、石器時代に放り出しても立派にきちんと生きていきます。しかし、着物を着た大人は、残念ながらもう生きられません。今日は、裸の人間の弱さを、知性と言語の限界に焦点を当てて、臨床の立場から問題提起をしたいと考えています。また、このまづ裸の人間ということでは、今生きている人類は、生物学上ただ一種しか生きていない、いわば絶滅寸前種で、一番弱い種だということにも留意したいと思います。

「細菌を作った」という先ほどの話はまったく間違いで、自然の法則に従ってわずかな手を加えて変形したというだ

けのことです。この問題は、倫理の問題であるとともに、(このシンポジウムの後起こった震災がいい例で) 予測可能性に関して、人間が持っている言語の限界性を冷静にわきまえて語らないと、とんでもないことを引き起こす問題だと思っています。近代科学が開発した技術で三〇年その正しさが続いたものを、医学に関する限りは、私はほとんど知りません。今、一〇〇年もっている薬が何種類あるか。幾つかはありますが、三〇年たてば、九五%が否定されます。つまり、ある時代で行った予想とは、数十年後には新たな知見によってまったく間違いであったと否定されるのが常です。そのような予測可能性の限界を踏まえて分析しないと、生物学的知見の社会応用は大変な危険を呼ぶだろうと思います。

宗教によって異なる人間観と共通する生命観

二番目の人格というお話はとても共感してお伺いしました。着物と裸という話からみて人格というのは、精神医学ではパーソナリティー、ペルソナ (persona・仮面) から来ており、この西洋の概念は、動物をしつけ、管理する文化から発したものです。ところが、日本人が人格と聞くと、

植物文化で木の根っこを思い浮かべます。すなわち、人間の中心にあるものです。日本にザビエルが訪れ「人は神に造られた万物の支配者だ」と説教したとき、人々は話を聞きながら、「人間ってそんなに偉いんですかねえ。犬も木も人間と同じように生きている。そう差があるのですか」と、きょとんとして聞いたという話をまた聞きで伺ったことがあります。狩猟・遊牧の民と採集・農業の民の差、西の一神教と東の多神教の差などと対比すると、一見、わかりやすい話です。人格を表面(行動)上の仮の姿とみるか、生命の见えない本質と見るかは、生業に支配されているところがあります。

しかし、東西の相違と言う視点より、私は共通性に注目したいと思います。マルタは九九%がカトリックで、パチカンの最優等生の国ですが、そこで神様を何と呼ぶか、ご存じですか。アッラー (Allah) です。セム語を話す人たちにとってはどの神もアッラーです。神の名は他にもあり、もともと多神教だったといえるだけでなく、アッラーそのものすらある意味で神々なのです。そうなると、近代の一神教的西洋から見た西と東という分類を超えて、もっと以前から続く神々の問題としての東西の共通性を考えてもよいと思うのです。人類は自らの予測可能性の彼岸に、予測

不能なる神々の救いと恵みを感じてきたのではないでしうか。しかし近代社会は、この神々の中に、まったく異質な神を生み出して付け加えた、私は考えています。

私に現代の神への違和感が生まれたのは、臨床家になってまもなくのことでした。患者さんと出会うと、医者として現代の科学的知識でものを考えている自分の方が、実は人間の本来性においては患者なのだという、直感に出会います。医者とのトレーニングを始めて一年後、一九七四年に藤枝の志太病院（現在の市立病院）で働きました。まだ四〇年もたっていないませんが、当時前任者は、障害を持っている子どもたちに、全員男の子はパイプカット、女の子は男性ホルモンの大量投与を行っていました。障害を持っている子どもには、将来子どもを産ませない方がいいと考えられていたための処置です。教科書には書かれていないことだったので、私は大きなショックを受けました。しかし、当時のお母さん方は、「前の先生は大変子どものことを思ってくれた。子どもの一生を考えれば、いい施設へ入るためにも、生理や性のことで迷惑をかけるような人間になつてほしくない。その親の気持ちを理解してくれた」と言っています。科学は社会的差別に便乗して、去勢と断種を最新の人道的支援に祭り上げたのです。私が、人間というのは

とても弱い生き物だと思ふのは、このような臨床的直感からで、理性を含む精神活動こそその最も弱い部分なのです。

そのときにふと思ひ出すのは、イスラムもキリスト教も聖典とする旧約聖書の「ノアの箱舟」の物語です。人間があまりにも罪深いので、とうとう神様は、すべての肉なるもの（全部の生き物）を終わらせるために、洪水を起こす。そのとき、ノアという唯一正しい人間とその家族だけは許される。この許しの故に、あらゆる動物とあらゆる植物等もノアの箱舟に乗せて生き永らえさせることになった。そういう話です。そこに面白い記載があります。「清い動物をすべて七つがいつつ取りなさい。それから、また清くない動物をすべて一つがいつつ取って、船に残しなさい」。つまり、人間がいいと思うものだけでなく、悪いと感ぜられるものも生かせと言うのです。どう解釈すべきか、宗教的にはよく分かりません。しかし私は、生き物は、そして、人間というのは、単独で個人として個別に抜き出して生きるものではなく、群れとして、それもあらゆる清いもの、清くないもの、生きとし生けるものと共にある存在だと解釈しています。

人間という生き物は、西でも東でも、いつの時代でも、貧しいと間引してきました。パイプカット、あるいは男性

ホルモンは、近代が貧しかったときに開発した間引きの道具のひとつにすぎません。私たちは、私たちが間引いていく（殺そう）として存在とは、何者なのかと問いかけます。しかし、ノアの箱舟は、この問いかけから、逆に、殺そうとする私たちを、何者かと問うているように思えます。重要なのはこの点で、一神教の神話も、日本的な多神教の思考形態も同じだと思います。しかし、近代の西方は、人間の生業を大きく変えることで、神々の本性をまったく変えてしまったのです。

工業と生命

一〇年前には、この神々の本性の特質を、現代人の生命観の変化にそって話させていただきました。そこで私が一番問題としたのが、工業化と生命の関係でした。明治から今日まで、第一次産業従事者が減少し、それと逆比例するように鉄鋼生産量が増加しています。鉄鋼生産量とは、重工業発展の指標ですから、日本の重工業発展とともに第一次産業の地位の低下が起ったことが分かります。このうち、第一次産業人口の減少と同じような推移を示すのは、妊産婦死亡率です。一方、平均寿命の伸び率は、鉄鋼生産

量と同じようなカーブを描きます。

前回は、工業化によって人間の寿命が倍以上に伸び、同時に同じ文脈で、妊産婦死亡率と農業人口が極端に減少したということの意味を、工業神のありようの一例として問う内容でした。人間の平均寿命は、ネアンデルタール人の時代から江戸時代まで、ずっと三〇〇四〇代でした。それが明治以降の一〇〇年で一気に八〇歳まで伸びたわけです。医療のおかげだと医者は自慢しますが、実は医療が延ばした寿命は一年ほどで、ほとんどが工業の影響、経済的豊かさによるものなのです。つまり、自然なる神が恵んだのと同じ、あるいはそれ以上の寿命を工業が作り出したわけです。必然物神崇拜が起ります。先ほど話された人間機械論に立つ工業の神に、現代人は知らず知らずにひれ伏します。この無意識の宗教性が、現代人の新しい神を生みました。

さらに、工業化とこれを支えた資本主義、民主主義の発展によって、私化された個人主義の教義が力を得ます。外科手術を受ける人間は手術台の上へ取り出されます。この瞬間、その人が誰とどんな関係を持っているか、どんな犬を飼っているかといったことは関係なく、まさに一個の物体として処理されるわけです。この孤立した個体こそ、精神医学を含めたあらゆる近代西洋医学の基本概念の中心を

占めるところが、漢方やインド医学などのほかの医学と違ってきたところです。西洋医学の成功が、人間を物のように扱う個人主義を強化し、ひいては工業神が造り出す間引きの技術と教義を補強してきたのです。

しかし前回の話の段階では、工業神はその没落期にあつて、なお豊かさの余韻によって間引きを許さないヒューマニズムを成熟させていました。それから一〇年、現代人の信仰は、別の神に交代しつつあるという話が今回のテーマです。前回は、この点について予感的にお話しただけでしたが、そのときの課題から入っていきたいと思います。

農業は「生き物を育てて」成立します。重工業の時代になると農産物業であれ工業製品であれ、「物を作って」生きます。農業神の死は、生命の神の死でした。群れで生きていた人間が、個人として一人抜き出されて生きる。そこでは、自己責任あるいは自己実現といった教義によって、自己が定義されます。人間がまるで神のように万能感を持つて、自己をコントロールしていく。工業が宗教性を支配したことで、このような宗教倫理を必要とする社会が成立したわけです。しかしそれでも、まだものづくりには製品という実体がありました。ところが、今、私たちが生産しているのは、例えばイチロー選手のようにオーラを輝かせる

イメージ的価値で、実体ではありません。携帯電話のように、その物本体の値段はどうでもよくて、周辺に生み出される情報の価値が大事になるわけです。この価値生産がバブル産業とともににはじけ、特殊な金融資本主義、マネー主義が生み出されていたのは、ご存知のとおりです。

実体には価値がないとなると、生存自体にも、それだけでは価値がないと

する新たな神の時代が到来します。

今回は、この神の姿から、この一〇年を振り返ってみたいと思います。

鉄鋼生産量を対数化してログで示したグラフと、平均寿命から四〇歳を引いた実数のグラフを重ねてみると、この二つは酷似してきます（図1）。

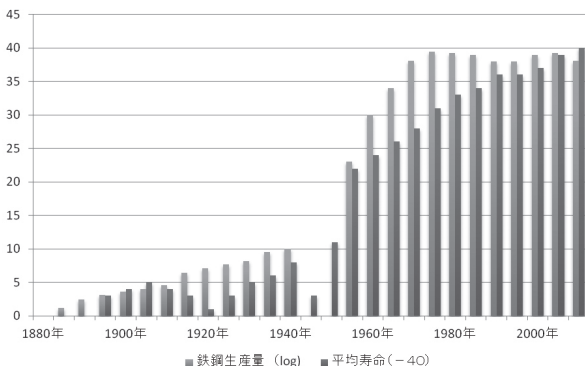


図1 鉄鋼生産量と平均寿命

しかし、このグラフには三つのブレがあります。第一は、工業は進んだが人は死んだ時代、日清・日露戦争の後です。第二が第二次世界大戦で、このときは工業も人も死に絶えました。第三の乖離が、平均寿命が伸び工業が落ちるという、今の時代です。三つのブレは、工業神の台頭、変質、そして危うさを反映します。

第三のブレこそ、新しい情報産業時代の神々、自己神を予感させるブレです。この神は実体ではなく、自らの生産価値の中心となるイメージで、人をマインドコントロールします。マインドコントロールに重要な役割を果たすのが、薬剤です。

日本で最初に作られた覚せい剤は、パイロットが集中力を得て軍機を壊さないために使用され、軍が厳重に保管していました。しかし、第二次大戦で軍が崩壊した瞬間に巷に流れ出て、俗に「ヒロポン中毒」と言われる第一次麻薬・覚せい剤ブームの火つけとなりました。リタリンはその流れをくむ覚せい剤なので、松田先生が言われたように、飲めば当然元気になります。治療という名目で覚せい剤依存や覚せい剤中毒にすることによって、パイロットに飛行機を守らせたように、大人は爵からハイにされ、子どもたちは集団規律に従わせられる。つまり、精神操作で集団利益

を守らせるのが精神医学で、男性ホルモン、パイプカットの現代版が、ドラッグです。実は、私は日本で覚せい剤リタリンを子どもに最初に使いだした医者の一人名ですが、五例目でこの恐怖を体験し、以後その危険を訴え続けてきたために異端視され、つい最近急に注目されるようになりました。

自殺死亡率の増大

薬による人間管理は、新しい神の宗教儀式で、中井先生も指摘された自殺の問題は、その御利益として喧伝されてきました。図2は自殺死亡率の経年変化（男子）ですが、ここで興味をひくデータがあります。このグラフは自殺者数と年齢（一〇代・二〇代・三〇代）をプロットしています。年を取るとともに人生に希望がなくなつて自殺が増加するのは分かるのですが、一九六〇年代、このグラフに世界的に類を見ない現象が表れています。一〇代から二〇代にかけての死亡率が非常に高くなっているのです。これは戦後日本に特有で、ほかに例を見ないものでした。しかし、一九九〇年ごろの日本の自殺率は、西洋化し、世界的には低い部類に入りました。ところが、以後、大人の自殺はど

んどん増える傾向にあります。ただ、子どもの自殺はまったく増えていないということを押さえておく必要があります。

図3は、年齢ごとの自殺死亡率（国際比較・男子）です。二〇〇四年ごろのデータですが、アメリカとスウェーデンはまったく同じラインで、日本は一九九〇年にはこの両国より少し低いぐらいでした。さて、自殺率が一九九〇年以後急に変わった国の一つがハンガリーです。ベルリンの壁崩壊後、ソ連を含め、東欧圏の自殺率はうなぎ登りに駆け上りました。そして、二〇〇〇年代の日本はその形へ近づきつつあります。このように自殺は社会の変化による人間の希望の変化を反映するもので、資本は新しい神に、リタリン乱用やうつ病における個人の精神操作によるコントロールを導入するよう要請したのです。

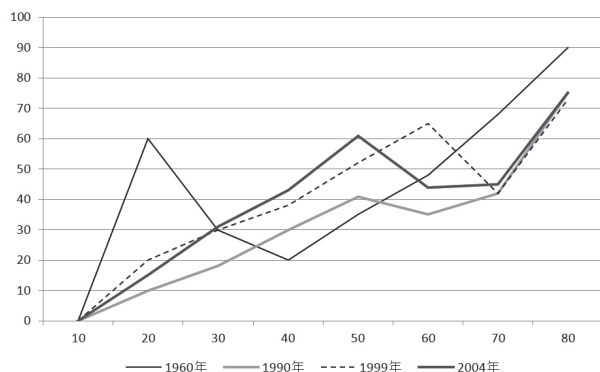


図2 自殺死亡率の経年変化（男子）

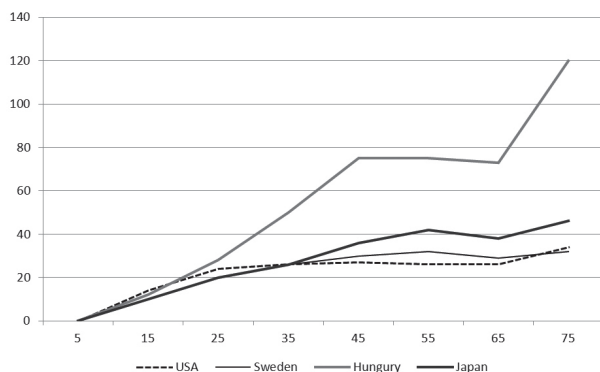


図3 年齢ごとの自殺死亡率（国際比較：男子）

社会問題の精神・心理化と資本

前回の講座が持たれた一九九九年を境に、精神科の診療所数が伸び、薬剤費が伸び、うつ病患者数が急激に増えた（図4）。本当にうつ病が増加したのかというと、それは疑問ですが、一九九〇年代にうつ病の定義が大幅に変

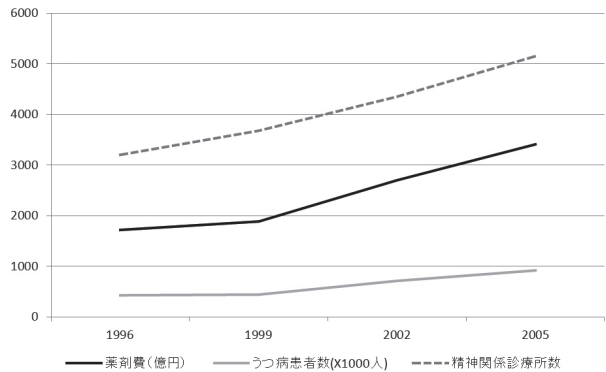


図4 精神医療の増加

なっではじめて「うつ病の患者さんで抗うつ剤を使っている人と使っていない人で、どちらが死亡率が高いか」、ようやく統計学的に検討できる段階になりました。その結果、抗うつ剤を使っている人の死亡率の方が高いと判明しました。生命を救う薬が、殺すための薬になりかねない（ただし、これは二八歳までの人の話です。また、うつ病の定義の変

わり患者数や薬剤費を倍以上に伸ばしたのです。一九六〇年代から、薬に頼る精神医療の嫌いな医者も、うつ病は命にかかわる病気だから他の精神障害と違って薬を使わざるをえないと考えてきました。ところが、定義の変化で抗うつ剤が大量に使われるように

化で、投薬適応が変化した点も注意しなければいけません。今も重症うつ病の人にとっては、抗うつ剤は非常な力で生命を守る重要な薬です。ここは誤解しないでください。私の話は、一般的な社会現象を強調しており、個別の患者さんの問題はまったく別の点をここでは強調しています。薬が使われて、改めて、薬とは一体何なのかというまったく新たな疑問が出てくるのです。

日本やアメリカで、なぜ薬漬けが進んだのかというと、製薬資本（とりわけスイスとアメリカの超巨大企業）の戦略と保険産業の利潤の問題が最重要です。医者が病気を作り、医療費を増やすことで、資本が拡大する。つまり、社会現象を医療現象として解決するという医療産業総体のニードが、新しい神の教義とうまく一致した結果です。二〇〇〇年代に入ると、心理学的アプローチによって解決しようとする心理主義の傾向も拡張しました。まさに、イメージコントロールこそ、情報産業社会の最大の宗教儀式となったのです。

その宗教が作り出し続けているイメージは、「今の子どもたちは危機にある」「がんが増加した」「成人病予防は子どものときから」「健康診断はぜひ受けなさい」など多彩です。しかし、これらのほとんどは、実体としてはまった

く根拠がありません。健康診断のやり方によっては、健康診断を受けない方がずっと死亡率が低いという報告までなされています。がんの増加も、ある操作的な文脈においてのみ成り立つイメージです。予防接種は人類という単位で考えたら、病気から身を守るどころか、その逆かもしれないません。医療の進歩は人間の寿命を増加させたといわれます

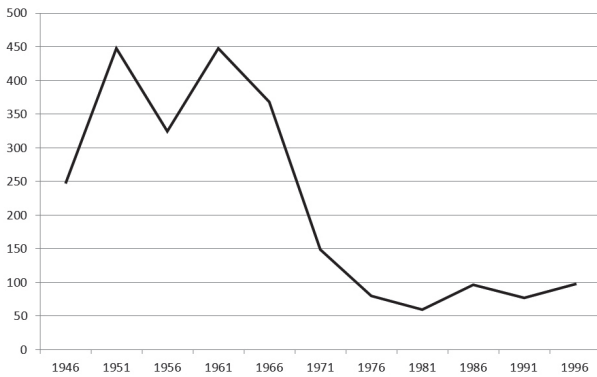


図5 少年殺人件数の推移

が、実際は増加した四〇年のうち、医療が貢献したのは一年か一年半分くらいとされています。つまり、実体ではなくイメージによって社会現象を医療に還元し、自己責任の問題にすり替えていく文脈を自己神が生み出したのです。新型インフルエンザに関しても、

あれだけ騒がれた結果がどうだったか。人間の予測可能性はこの程度の実力なのに、自己神は実体予測を軽視し、イメージのみを肥大化させます。もう少し見ましよう。今の子どもたちはおかしくなっている、犯罪が低年齢化し、凶悪化し、さらに増加しているといわれます。しかし、少年殺人件数の推移を一九四六年から一九九六年で見ると、言われている事実がまったく根拠がないと分かります（図5）。にもかかわらず、事実は一切無視され、あらゆる新聞が一九九六年以降だけのデータを示す中で、二〇〇七年一月に少年法が改悪されました。赤裸々な、裸の人間の実体を見ないで操作された数字が生み出すイメージを見ると間違える情報操作の時代になったのです。

軽度発達障害とADHDの子どもの増大

自己神が台頭する流れの中で、発達障害という問題が注目されてきました。それまで日本では、知的障害を中心に二％前後が子どもの障害と見られていました。しかし、二〇〇五年頃の一斉調査以後、急に軽度発達障害という言葉が注目され、一挙に八％まで障害者数が増大しました。アメリカとドイツでは三〇％が発達障害と言われる時代が

来ています。しかし、実はこの発達障害については、来年（二〇二一年）二月に静岡大学で先生方にお話しすることになっていますが、昔から存在したもので、大学の研究者では、たぶんかなりの数が医学的には発達障害となってしまうでしょう。弁護士や医者にも、銀行家にも少なくありません。その一つが、自閉性スペクトラム、あるいは広汎性発達障害と呼ばれているもので、次の三つの特色があるとされます。第一に人間関係がうまく作れない。第二に自分の意思を伝えるコミュニケーションが下手で、その結果、集団生活がうまくいかない。第三に、ある独特のこだわりがあったり、人間関係における雰囲気を読むのが下手だったりする。

もう一つが、注意欠陥／多動性障害（ADHD… Attention Deficit Hyperactivity Disorder）や注意欠陥障害（ADD：Attention Deficit Disorder）と言われるものです。ADDは最近テレビで「片付けられない女たち」として幾分誤って紹介されているように、物事を集中してできない状態を特徴とするものです。あることをやりだすと、ほかのことに気が行ってそれをやりだすという形で、次から次へと注意が移っていくので、結局何をやるうとしたか分からなくなるほど部屋中が散らかり、片付けようとすればする

ほど散らかってしまうなどということもある。注意力がない、集中力が続かない、興味が移ろい易い人を指して用いられます。この状態にH（多動と衝動性）が加わったのがADHDで、ちょこちょこ歩き回ったり、突然ぱつと行動を起こしたりする。松田先生の資料では六%になっていますが、二〇〇八年にはアメリカでADHDだけでも八%という報告が出ています。

詳細を省略し単純化して話しましたが、今やマスコミが犯罪の原因とまで言い始めるような誤解と偏見が広がっています。原因については、母親の育て方から環境ホルモン説まで、この三〇年間にさまざまな説が出ては消えました。直近の説は脳機能説・構造特異説で、障害とみなす傾向が強まったため、教育現場から病院への相談が急増しています。二年以上の予約待ちという病院も少なくありません。うつ病同様、社会問題を医療問題化することによって、精神科バブルと呼べるような現象が起こっています。

さて、多動で集中しないということは、いったい何が問題なのでしょう。背広を着た人間としては問題かもしれませんが、全人類の問題として冷静に考えてください。つい一〇〇年前まで、生き物は自然の中で暮らしてきました。もし子どもたちが狼がやって来てもじっと集中して草

花を観察しながら文章を書いていたら、どうなるか。本来、一〇歳ぐらいまでの子どもは、集中するのではなく、衝動的に多動になることによって、生きる防衛を学んだはずなのです。何かがあればばつと注意を変えることこそ、哺乳類が生き延びるのに最も必要な才能です。しかし、この何百年かの文化は、自然的な危機がまったくなくなってしまうたかのように子どもを育て始めました。人類は世界を変え、

地球の王者になったと錯覚し始めています。しかし、人間がばい菌より賢く偉いなどと思ったら、大間違い。一つ間違えれば、ひ弱な人類が減ぶことなど簡単なことなのに、工業神は、自然的寿命より多い人為的な寿命を造りだしたことで、自然神に守られて成立してきた人間の精神性を否定しました。その後に登場した自己神は、もつと空虚なイメージに精神性を委ねようとして、人間の自己過信を深めています。

人類の未来を左右する脳の領域

自然界であれば、一〇歳になれば多動は落ち着き、集中力が出てきます。人間の脳の九〇％までは、哺乳類として生きてきた二億年の人類の歴史の中で作られたもので、自

然界と人間との対応がどう行われるかがプログラムとして刷り込まれています。しかし、人為社会でのプログラムは組み込まれていません。

ライオンもトラも蛇も、襲うときは同じ格好で襲うので、危険信号は一定のルールとして分かりやすいものです。そうした自然界から与えられる危険信号をやり取りしている間に、人間は自然に安全を覚えます。しかし、人間社会での安全性は分かりにくい。皆さん方は子どものためと思って、予防接種に連れていかれるでしょう。そこで医者は注射針で襲いかかるわけです。それもにこにこ笑って頭をなでながら襲いかかる。そこまでならまだいいです。哺乳類の親は、子どもが襲われるとほとんどの場合、身を挺して敵から守ります。しかし、予防接種のとき人間の親は敵に加担する。これは一つの象徴的場面です。本来人間は集団で安全を確保してきたのに、今では最も信頼すべき親子関係すら安全でない。そんな錯綜の例は、日常生活の中でも子どもたちの周りに満ち溢れています。一例を挙げると、生物は本能的に火を恐れるようプログラムされていますが、工業神が開発した電気コンセントは見た目にかわいいおもちやのような格好をしているので、人間の子どもの心には火より怖いとは感じられないといったことがあげられます。

子どもたちには、石器時代へ戻っても十分生きられる脳のプログラムが組み込まれていても、人為的な時代へのプログラムはまだ組み込まれていません。特に言語を使用し、抽象思考を使用するための脳のプログラムは不確定で、いろいろなパターンがあつて当たり前です。そして、この部分の多様性こそが、たつた一種類の種になつてしまった人類の唯一の希望なのです。何種類もいる動物なら、一つの種が減びても他が進化して生き続けられます。人類はわれわれの種が減びたら、あとがないのです。もうノアは救われないかもしれません。いずれにしても人類は、脳の中にまだ使われていない部分の多様性を保つしかなないのです。とりわけ、主に言語によつて自らを支配するような精神領域に関しては、何億年もの生物学的なプログラム化を経ていないので、その使用方法については個人差が大きい方がいいのです。

先ほど言った自閉的な子どもが研究者になぜ多いかというと、他人と違うさまざまな裸の思考形態や認識形態を持てるからです。しかし最近の大学では、裸の人間より、服を着た妥協がうまくて人間的ルールに乗りやすい現実的な人が増えています。つまり、この脳の領域が、工業的非自然性と情報神のイメージ操作によつて、画一的な方向に支

配され始めたのです。服を着た人類の英知によつて、裸の生き物が危機的な時を迎えると、人類にはほとんど可能性がなくなるのではないかと私は危惧しています。

実は、一八世紀まで、精神障害はなかったという研究者は少なくありません。有史以来、人類はうつ病とてんかんと呼ばれる現象以外を認識してこなかったのです。医療が進歩したから新しい病気が「発見された」のだと言いますが、それはうそで、「創り出された」のです。統合失調症などという病気がない時代、人間は大いに幻を見、夢を見、狂う存在でした。夢、幻、うつつの中に、人はさまざまな可能性を見いだしてきたのに、その希望を失ったときに、私たちはそれを病気と名付けました。近代西洋文明は、多様な人間を排除しないと成立しなくなってきました。

中国やアメリカのように今後の社会は、一割のリッチな人間と、二割のそこを目指せる人間以外の七割は最下層を営むような形態になつていく可能性が高いように思います。これに備えて欧米が選んだのは、犯罪的ケア、社会福祉的ケア、医療的ケアなどを仮定して低社会層をケアの対象とすること、社会の安定化を図る道です。その結果今や、発達障害三割、うつ病一割、その他合わせてほぼ七割の人間を精神病という形で分類処遇する必要がある生じたのです。

これが工業神後の新しい神、自己神の中心的戦略で、精神医療化、心理化した社会を生み出しました。

ある子どもの最後の言葉

観念的な話を、二人の子どもの話で補います。最初は、あまりにも重症の上、八歳までしか生きられないために、パイプカットしてもらえなかった一人の子どもの話です。親が家の中で手厚く囲い、外の社会を知らない子でした。学校に行く年齢になり、就学通知が来た瞬間、親はどきりとしました。心臓の病気を抱えて常に酸素を浴び続けていたので、学校など行けば八歳の寿命が七歳にも縮むことを、知っていたからです。しかし、学校は、家のすぐ近くにある自分たちも通った懐かしい思い出の場所でした。「少しでも苦しい思いをさせないように家で酸素を使いながら大事に育てきた子を、今さら外へは出せない」という思いと、「この子が産まれたときに一緒に産院にいた子どもたちは、皆この通知を受け取って学校へ通い始める」という思いが、悩ましく交錯します。何度も迷った末、「ちよっとだけ学校へ行つて、しんどくなったら止めればいい」と決断しました。ところが大人の社会が、このような子どもを受け入れるは

ずはありません。教育委員会は、養護学校（現特別支援学校）なら行ってもいいというのですが、遠くの学校は無理な上、産院での仲間もいません。親子は、行政指導を強行突破して、目の前の学校へ行きました。

不幸は、すぐに起こりました。子どもは登校するとすぐ疲れ果てて、一〜二時間で帰宅して酸素を必要とする。そこで通学を止めようとするのですが、三日も家で休むとまだ弱っているはずなのに、また「行きたい」と言いだす。これをくり返し、学校へ行くたびに弱り、半年後、ついには帰らぬ人となりました。七歳にもなれませんでした。しかし、亡くなるときに、酸素ボックスの中で大量の酸素を浴びながら、一〇〇メートル全力疾走したのと同じぐらい心臓が苦しい状態なのに、なおその子は何か言おうとします。耳を近づけて聞くと、「もう僕おしまい」。親は「そんなことない」と励ますけれども、そのときばかりは普段従順な子どもの方が頑とそれをねつけ、「もう僕おしまい」「分かった。静かにして」。そんなやりとりの後、彼が言った言葉は、「みんなに伝えて。さようなら」でした。その言葉を最後に、二〇秒後には帰らぬ人になりました。

その時、親は自分たちが一番恐れていたことは、防ぎようもない死そのものではなく、それ以上に親より先立つ孤

独な死に對し何もできない自分たちの弱さと孤立だったのかもかもしれないと気づきます。

しかし、子どもは、皆と生き、生も死も、友とともに迎えたのです。

人間が群れをなす生きものである以上、個人を抜き出して価値をうんぬんする社会は、基本的な限界を抱えています。人間一人一人は、何にもできない虫けらのような弱いまじめな存在だからこそ、みんなと生きる恵みが与えられているのに、現代はその恵みを見失っています。

もう一人だけ、簡単にお話しします。自閉的な発達障害の子で、普通学校から拒否されたのですが、おばあちゃんが「どうせ人間みんな同じ。みんなと生きてりや大丈夫」などと言う大らかな人で、やはり近所の学校を選びました。その子が中学生のときに、おばあちゃんは亡くなります。学校から帰ってきたら、亡くなっていた。自閉的な子は新しい変化に敏感に反応しやすく、彼は家中を暴れ回りました。通夜の席でも、読経が流れる中を走っていつて、おばあちゃんの棺桶をバーンと倒す。白木の棺桶からおばあちゃんの遺体が出ると、それを抱きしめて、キスをしながら踊る。その子はみんなに取り押さえられて、鎮静剤を打たれて寝かされました。お通夜の席では「あんなにかわいがつてく

れたおばあちゃんの死もいためない、まったく心が通じない子。施設へやった方がいい」という声のあがる中、一人寝かされました。

自閉的な子の特性で、この子には、何時何分になったら何をするという決まりがありました。学校へは四〇度ぐらい熱があっても必ず行く子ですが、その次の日は、まったく起きてこないで寝ていました。それから一週間、部屋の中で寝たきりになり、一週間たったら、けろっと元の生活に戻ったのです。やがて転居するまでの一七年間、毎年、おばあちゃんの命日になると、自分でそのときに着ていたパジャマを引っ張り出してきて、一週間部屋の中に閉じこもっていました。「惜しいおばあちゃんを亡くした」と嘆いた人たちも三回忌を過ぎるころにはおばあちゃんのことを忘れているのに、三〇を過ぎて体に合わなくなった、ボタンをはめようにもはまらなくなったパジャマを引っ張り出して、彼は一週間、喪に服すのです。この行動は、発達障害の症状とみれば、医学的には病的固執性、心理学的には自閉症特有のマインドリーディング（人の心を読む）ができない状態と見なされるでしょう。

しかし、私のように人の死に接して直後はショックを受けても数日後には忘れられるのが正常人で、彼は医学的心

理的障害者だとみなしていいのか。最初お話ししたように、私が自分のほうが人間として患者者なのではないかと感じるのはこのようなときです。科学的な成果としての予測可能性が、アツラーの与えた自然の摂理の前に碎かれます。そして、了解します。私のような忘れる心性も、彼のこだわりも、人類の文化の生んだ心のありようのひとつで、いずれも人類に与えられた大切な恵みだと。その恵みとしての心や精神は、手術台の上に載せて、個人の責任、個人問題としてのみ取り扱おうとしていく、今の文明・文化のありようでは、人間の精神は滅亡するのではないか。ノアのように多様な心のありようを認め合い共に生き合う雑多な共生の中にしか、人類が生き残るすべはないのではないか。以上、感覚的な話になりましたが、裸の人間と知性や言語の限界について、イメージ化する新しい神の問題とその予測可能性の限界として話しました。農業神、工業神、イメージ神を超えたアツラーは、今、障害者を一つがいも選ばない人類に洪水を起こそうとしているように思うのです。

パネルディスカッション

パネリスト

石川 憲彦
松田 純
田島 靖則
中井 弘和

コーディネーター

中井——これまでの三人のパネリストのお話は見事に一つのストーリーになっており、その中でいろいろな問題点を提起していただくとともに、共通の一つのメッセージが出されていたと私は考えますが、もう少し個別の問題等にかかわって、それらを確認しながら討論していきたいと思えます。

お話を伺っていて、命の問題を考えるとときに重要なことは、やはり神・人間・自然の関係性というか、あらゆる命は互いに循環し、関係し合っているということだと思えます。そのような関係性が、科学技術が過度に発展することで壊されてしまっている。今後、命を回復するため、ある

いは命を重視する時代を創造するために、この関係性をいかに再生していくかということが一つの重要な課題になると私は思いました。

例えば、松田先生のお話に出てきたiPS細胞は、さまざまな科学技術、医療技術、生殖医療技術がある中で、ある意味では非常に理想的な科学技術でもあるように思われます。実は私の近くにもALSなどの難病で苦しんでいる人たちがおり、この科学技術によって彼らが救われる可能性が出てきたということは非常に面白い話題なのですが、一方で、生命にかかわる科学技術にはネガティブな部分もあります。例えば生命を人工的に作ってしまうという可能

性は、本来の命の循環や関係性を離れた、工業化社会の延長線上での話で問題点も多く含まれると思います。ここでは、新しい技術のポジティブな面なるべく残しながら、ネガティブな部分をどう社会としてコントロールしていくかということが重要な課題になるかと思いますが、生命倫理的な観点から、この点についてコメントをお願いしたいと思います。

iPS細胞の可能性と危険性

松田——iPS細胞がどこまで成功するかは、まだ分かりません。人に対する臨床試験はまだまったく行われていないため、これからです。ただ、幹細胞研究はどんどん進んでいます。われわれ自身の体の中にはいろいろな幹細胞がありますので、それを患者から取り出してラボで増殖させ、もう一回患者に戻すという臨床試験が行われており、成果も出ています。それは確実に発展していくと予想しています。それによって、これまで助からなかった難病の治癒が期待され、多くの難病者から山中先生に対して、早く研究を進めてほしいと強い要望が来ているそうですから、それは一つの発展として評価し、見守っていく必要があるでしょう。

う。

しかし、先ほど紹介したように、iPS細胞から精子・卵子を作って人を作るというような、これまでの生命の在り方を根本的に変える可能性もあります。こうしたことについては、社会の在り方との関係で、みんなそれを議論して、どのようにするかを考えていく必要があります。日本では二〇一〇年五月に、iPS細胞から卵子・精子を作ることを文科省の委員会で議論して、すでに認めています。もちろんそれは、「ヒト胚を作成しない」という条件の下ですが、不妊治療に役立てるといった理由でどんどん進んで行くので、なしくずし的に展開していかないような歯止めが必要です。その辺を、国民のなかでの対話と合意形成によって、どうコントロールしていくのが課題になってくるでしょう。

中井——ありがとうございます。私は、カトリック教会がこの技術を歓迎したという話を非常に面白いと思います。聞いていました。田島先生、宗教界の立場から、この点についてコメントをお願いします。

田島——カトリック教会が歓迎したのは、要するに受精卵

を破壊する必要がなくなっただけです。ですから、松田先生が発表されたような不妊治療の一種として許されるか、あるいは同一人物から精子と卵を作成して、胚を作成するということは許されるかといったことになる、そこは恐らく全部ノーです。カトリック教会がイエスと言わずがないと考えます。同性同士が子どもを持つなどということも同様です。何しろローマ・カトリック教会は、つい最近まで避妊すら公式には認めていなかったのですから。

つまり、それだけ自然とは何かという議論が必要になります。自然であるということ、神によって創られた自然の人間としての営み、家族としての原形は、ヨセフとマリヤと赤ちゃんのイエスというのが、カトリック教会の聖家族という家族の原形像なのです。それ以外の形の家族像が受容できるかどうかということです。私はプロテスタントの牧師ですが、カトリック教会というのは圧倒的に数が多いし、やはりキリスト教の中では圧倒的な力を持っていますから、その主張は絶対に無視できません。

しかし、例えば同性婚やホモセクシュアルの問題は、実はアメリカの宗教界でもホットな問題になっています。例えば、同性愛を表明した人物を聖職者として登用していい

のかどうかは、ルーテル教会の中でも意見が真つ二つに割れています。ローマ・カトリックも当然認めません。ですから、ローマ・カトリックがここで歓迎したのは、あくまでも受精卵を破壊しなくて済むことになるなら大歓迎という、その点だけだと思います。

中井——分かりました。これは、下手をすると誤解されてしまいますね。石川先生はこの問題についてすでにかなり明確に答えを出されていたのではないかと思います、補足等がありましたら、お願いいたします。

石川——一〇年前、私はクロインの話を例に、古典的な所有権と結びついていた古い道徳を利用しながら工業神が性を商品化していく経過について話しました。この問題と比べると先ほどの自分の皮膚細胞から性細胞を作っていくという話は、まだ技術的には若干難しいところもあります。しかし技術が切り開かれてから気付かされる生身の人間の問題は、より深刻になると思っています。

一方で、命とはDNAだという極論が現実味を帯びてくるでしょう。これは、生物の身体は生命が生き延びていくための手段にすぎないとして、古くから神秘主義の中に

ずっとあつた議論の延長です。三五億年前に生まれてから、二〇億年近くは単細胞だった命が、今のような身体を持つようになったのはDNAの生存戦略の一つにすぎない。つまり、人間の身体はDNAを守る容器にすぎず、本質的に意味があるのは次の生命を作る精子と卵子だけで、それ以外は付属物だ。そういう議論ですが、もう一方では、ノーベル賞を取った利根川さんが一九八〇年代に、こんな風に言っていたと記憶しています。「限りある地球で私たち人類は、生物として永遠に生き残ることはできない。もし人類に未来があるなら組成を変えて生き残るしかない」。私は、これを実体は無意味で、情報にのみ価値を認める社会の教義だと考えます。今日の生物学でいうと、上記のクローンの話は免疫学的自己（個）の問題、利根川さんの話は神経学的自己（全体）の問題として対立概念をなします。しかしこういった問題に対し、iPS細胞は今私達が語っている言語のレベルではまったく表現できない事実を突きつけるでしょう。技術的にも今私たちが想像できる発がん性の問題といった内容とは異なる、予測不能の問題が起ってくるでしょう。いつの時代でも人間が先取りして予測できるのは、あらゆる可能性の二割程度だと考えます。つまり八割は、予測不能というのが知性の本質なのですが、問題

はその予測不能性の生み出す結果が、新しい言語や価値体系を造り、古くからの議論と異なる議論を持ちこむことです。しかも、新しい神は、もともと、この本質を実体ぬきでイメージに変えて吹き飛ばしかねないところがあるので、とても恐ろしい。

技術上の問題を完全にクリアできないうちに提起される倫理には、相当気を付けなければなりません。先ほどの利根川さんの言葉のように、今の私たちの身体性などには意味がなく、人間が作ってきた文化と遺伝情報だけが、邪魔な身体性にも邪魔されず生き延びればいいという考え方は、すでに誤ったイメージとして多くの人々に浸透し始めています。

自然とは何か

中井——どうもありがとうございました。「自然とは何か」という問題が大きく浮かび上がってきたかと思えます。松田先生が提言されたのは、自然を守ることはもちろん重要だが、同時に内なる自然、すなわち人間性、あるいは人間の心を守るということも必要になるということをお話しされました。ここで少し自然とは何かについて、簡単に議論

してみたいと思います。

例えば、田島先生は牧師さんですが、「創世記」の初めに「神は人間が自然を支配するように人間を創った」というような記述があります。これには批判もあるかと思いますが、このキリスト教の自然観のようなものにかかわって、コメントをしていただければと思います。

田島——旧約聖書の最初に「創世記」という書物がありますが、そこに書かれている創造物語や創造神話と呼ばれるアダムとイブの物語は、皆さんも聞いたことがあると思います。最初にこの世界が創られて、人間が創られたという物語が書いてあります。その物語では、神のみが非被造物で、それ以外のものはすべて被造物ということなのです。人間も被造物で、それ以外の動物や植物なども被造物で、人間は一応その被造物を取りまとめる役として、その物語の中では登場してきます。それは何という日本語の訳を付けるかによって違ってきますが、元はヘブライ語で、今の聖書では「支配せよ」と書いてあるのです。つまり、他の生物を支配する。この「支配せよ」が工業化と結び付いて、自然の大規模な破壊をもたらしただという批判が、やはりキリスト教思想には向けられるようになりました。

しかし、「支配せよ」ではなくて、本当は「管理せよ」、スチュワードシップ (Stewardship) なのではないか。つまり、「みんながうまく生きられるように管理しなさい」と神様から委託されたという物語なのだと読まなくてはいけないところを、「支配せよ」と読んでしまい、だから好きにしている、要らない動物は絶滅させていい、人間だけが生き延びられるように都合のいいように自然をいじってもいいのだというように、キリスト教の、あるいはユダヤ・キリスト教の創造物語は読み解かれてきてしまった。それは反省すべき点だし、本当はそうのように読むべきではなかったのではないかということが、環境問題などの中で新しい読み解き方として提唱されています。つまり、「みんなが生きられるようにしなさい」と神様に言われたのに、実は人間だけが生き延びられるようにしてしまったという反省が起こっているということです。

中井——私もそこところはすごく気になって、繰り返し読んで真の意味を理解しようとしてきたのですが、ある専門家の意見によると、もともとのヘブライ語では「支配せよ」という言葉は、「他の生物と共生しなさい」という意味らしいのです。それが「支配せよ」という言葉になって、英語

の聖書でもだいたいそのような言葉が使われています。ただ、少数ですが、「治める」という語が充てられている聖書もあります。治めるなら分かります。正しく人間が治める、あるいはケアするという意味につながるかと思います。そのように解釈していただければ私としては大変ありがたいと思います。

この点について、石川先生でも松田先生でも結構ですが、少し補足をお願いしますか。

松田——今、田島先生がご紹介されたとおりですが、中井先生がおっしゃった「創世記」の一節は、このようになっています。「地の上を這う生き物をすべて支配せよ」（創世記1・26・28）。「地の上を這う」というのは蛇などのような小動物であって、生物全般ではないです。これについて、いろいろな解釈があります。ヨーロッパの思想家の中でもリン・ホワイト (Lynn White) などが「人類は環境破壊の元凶だ」と言った（『機械と神』）のに対して、今、田島先生にご紹介されたスチュワードシップ、いわばマンシヨンの管理人というような考え方があります。「人類はこの地上の管理人なので、うまく共生するようにきちんと管理していきなさい」というのが聖書の二節の意味だという解釈が、

現代の神学の中で言われています。

ヨーロッパの倫理学では、自然に対する考え方が日本とは違います。日本人は割合「自然の理」にそって、自然と和して行くという感じになるのですが、ヨーロッパ人は自然に対する「人間の責任」を強調します。つまり、自然を徹底的に管理するという立場から発想します。環境倫理においても動物倫理においても、ヨーロッパでは責任を果たすという観点から進むという面があります。例えばドイツ連邦共和国は、二〇〇二年にドイツの憲法（基本法二〇条a）の中に、「将来の世代に対する責任から」「生活の自然基盤と動物の保護」を国家目標として書き込むに至りました。具体的な例をあげれば、EUでは二〇〇九年三月から、動物実験を行って作った化粧品は販売できなくなりました。化粧品の材料になる開発途中の物質の毒性を見るために、ウサギの目にそれを入れて試験し、最後にウサギを安楽死させるといことがなされていますが、そのような実験を経て製品化された化粧品はヨーロッパでは販売できないところまできています。このあたりに、人間が自然に対してどのように責任を果たしていくのかという態度の点で日欧の差が出てきます。

中井——聖書的、あるいはキリスト教的に言うところ、神の人間に対する最大の掟は「互いに愛しなさい、隣人を愛しなさい」ということだと私は理解しています。その場合の隣人とは何かということが、また問題になるかと思うのです。私自身はこの隣人の中に、人間だけではない土や自然といったものも含めて考えたい。どちらかというと、エコロジカルに聖書を理解したいという思いがあるのですが、石川先生はずっと、循環する関係性の中でこそ命は育っていくのだと言っておられます。この点について一言お願いします。

石川——私も含め、人間はしよせん自分で生まれてきたわけではありません。与えられてきた生命は、実体としてより本来無力なことを自覚して、より大きな他者との関係性の文脈で理解されるべきだと思うのです。人間は二億年かけて生きてきた哺乳類の一つです。哺乳類は恐竜が生きていた時代には非常に弱い動物でした。その哺乳類の中でさえ、人間はどちらかというと弱い存在です。その弱い人間が生き延びられたのは、いろいろなものが食べられて、群れで世界中へ移動していったからだと思ふのです。その過程で、人間は足の速い動物ではないから、元々は大型動物などは襲えなかったのに、常に集団であきらめずに追

いかけ続け獲物が取れるような集団行動を獲得した。ともに希望を持って忍耐強く進むことで、ようやく生き延びてきたのだと思います。とはいえ食べる相手のほうが強いのですから、そこには恐れと畏れが残ります。アニミズムは、人が本来弱いからこそ得られた恵みを、自然への感謝と崇拜という関係性において表現した宗教だと思います。

先ほどザビエルのお話をしましたが、一神教の場合も同じでしょう。アッラーには、基本的に生きとし生けるものに宿るさまざまな神々が含まれていると思います。日本ではカトリックもプロテスタントも、北ヨーロッパの思想で議論されますが、私がいたマルタなど南では、神々の代わりに聖人がたくさんいて人々はそこへ拝みにいきます。ですから、カトリックが強固な一神教だとは私は思っていません。元々一神教の神の言葉は、われわれにとって絶対に理解できない、神の側でしか決定できない言葉としてあるわけで、そこでも本来的な人間の無力さに立ち戻り与えられた生命を関係性の中でどう位置づけて言語化するのが再度問われます。

——自然との関係は、自然的生き物である人間自身との関係性にも反映します。私達は障害者など弱者を時代社会の価値観だけで見て、生きる価値がないと考えがちです。代表

的なのは脳死の問題で、二人の人間が生きているのに、片

方を生きていないと見なします。しかし、実は脳死判定の後、生き延びていく人は相当多くいます。さらに、脳死判定後に脳のいろいろな機能が再生しだすことも知られているのです。そうすると、脳死による臓器移植という工業技術は、生死を判定しているのではなく、生きるに価値ある人間と駄目な人間の差異を宗教によって正当化することで成立することになります。私は新しい神は、様々な関係性の位置づけを、今後ますますおかしくしていくと思うのです。

私たちは人間ですから、まずあらゆる人間がともに生き合えることを大切にします。しかし同時に、生命を食さないと生きられない中で、生きとし生けるものを、どのように大切にしていくのかも、考えなければならぬ。先ほどの「創世記」の箇所は、ノアの箱舟の話に至って、神様は再び清くない生き物も生かすという文脈につながります。さらに、預言者イザヤ (Isaiah) の書では「オオカミは子羊とともに宿り、ヒョウは子ヤギとともに伏す。子牛は若獅子とともに育ち、小さい子どもがそれらを導く」「乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子はマムシの巣に手を入れる」と表現します。そのような関係性が、イスラム教にも、キリスト教にも、ユダヤ教にも、聖書の中でアッラーの神話として生

き延びていると思います。

科学論・技術論から見た自然観では感じ取れない 生命の不思議

中井——今の自然とは何かというお話のベースにある重要な問題として、技術論あるいは科学論があると思います。今の技術や科学が、自然を機械仕掛けで理解するものだということは確かだと思います。ですから、脳死の話が出ましたが、例えば脳以外の臓器が破壊されたとき、そこに誰かの臓器を持ってくれば人は生きられる。それが一つの技術の基本的な考え方であるかと思いますが、命というのは必ずしも機械仕掛けではない固有な働きをすると私は思うのです。例えば、目の見えない人、耳の聞こえない人は、本当に見（観）えないのか、本当に聞（聴）けないのか。恐らくそうではないでしょう。ヘレン・ケラーの話は非常に有名ですが、例えば目の見えない辻井伸行さんというピアニストは非常に絵画が好きで、絵画鑑賞をして、「この絵画が好きだ」などと言うそうです。それが一つの生命の不思議さ、命の不思議さだと私は思います。この技術論・科学論について、先ほどの続きになるかもしれませんが、何か追加のコメントをいただければと思います。

松田——一〇年前のシンポジウムは「科学と宗教」というテーマでしたので、そのなかで、科学は宗教の反対のように思うかもしれないけれど、科学が発展していくと宗教的な直感が再評価されてくるのではないかということを申しました。その予想は今、私にとって確信にまで深まったという感じです。現在、科学の目が細胞、遺伝子、さらにDNAという分子レベル、生命の最小単位にまで達してきました。そのことによって、かえって生命（いのち）の最大級のつながりが見えてきた、そういう時代に私たちは生きています。

一個の細胞は「ミクロコスモス」と言われる小宇宙です。そのなかに地上における生命進化の歴史が凝集しているという見方を科学者はします。「ミクロコスモスとマクロコスモス（大宇宙）との一体性」と表現されます。例えば、私たちの生命活動を支えている基本要素であるアミノ酸や、あるいは生きていく上で不可欠な水は、地球誕生間もないころに、宇宙から飛んできたと言われています。ですから、私たちがいま生きているということは、四五億年の地球の歴史、それから一三七億年の宇宙の歴史と切り離せない形になっているわけです。現代の生命諸科学は、アトミズム

（原子論、要素主義）を徹底していった先に、非常にエコーロジカルな壮大なつながりにぶつかっていると思います。それは、日本のアニミズム的な発想と必ずしも矛盾しません。一木一草の中に神が宿ると言われます。御神木というのがありますが、それを拝むことは、眼前の一本の樹だけを拝んでいるとは限りません。樹は独立してそこにあるわけではなく、太陽の光や地中の水などによって生命を支えられています。ですから、同時に、宇宙の生命エネルギーを崇めていることになります。「一木一草の中に宇宙の真理が宿る」と言い換えてよいでしょう。

現在の日本の科学者もさまざまな表現でこのことを語っています。物理学者の佐治晴夫さんはこう言っています。人間は星のかけらが集まってできている。すべては、ひとつのもの（「ビッグバン」）から始まり、すべては互いに関わりあっている（『からだは星からできている』春秋社、二〇〇七）と。彼は現代宇宙論を、神道的な自然崇拜の延長線上で捉えようとしています。

分子生物学者の福岡伸一さんは、ルドルフ・シェーンハイマー（Rudolf Schoenheimer, 1898-1941）の『生体の動態』（一九四二年）の理論を紹介しつつ、こう言います。いのちは物質代謝の一つの流れにほかならない。無数の分子はた

えず動き回り、いつも流れのなかにある。そこここに「淀み」が生じ、そこにつかの間、ある秩序が生じる。その秩序が生命だ。それゆえ、われわれのからだはなんら実体ではなく、流れのなかのある種の淀みにすぎず、ただ一つの大いなる流れの一部なのだ（『もう牛を食べても安心か』文春新書、二〇〇四）、と。生命のこうした捉え方は、仏教的な存在論にも通じます。

難病に罹患する前は生命科学者であつた柳澤桂子さんは、多くの著作のなかで、個別の生命と宇宙との一体感について書いています。柳澤桂子は『般若心経』を現代日本語に訳す際、仏教の根本思想を科学的な言葉に置き換えました（『生きて死ぬ智慧』小学館、二〇〇四）。

私たちは 広大な宇宙のなかに 存在します

宇宙では 形という固定したものはありません

実体がないのです

宇宙は粒子に満ちています

粒子は自由に動き回って 形を変えて おたがいの関係の安定したところで静止します

お聞きなさい

形のあるもの いいかえれば物質的存在を 私たちは

現象としてとらえているのですが 現象というものは時々刻々変化するものであつて 変化しない実体というものはありません（色即是空）
実体がないからこそ 形をつくれるのです

このように非常に科学的な言葉で、この色即是空、空即是色ということ語っています。今、科学はそのような地点にきているのではないかという印象を持っています。

宗教と科学の関係性について

中井——一〇年前に科学と宗教をめぐって、松田先生と田島先生が議論をされましたが、田島先生、宗教と科学の関係性について一言お願いします。

田島——会話の糸口があるのかないのかというところで、いつも止まってしまうのですが、今日はカトリックの方に申し訳ないことばかり言ったので、カトリックの方を評価することを一つ言いたいと思います。フランス人のイエズス会士で、ピエール・テイヤール・ド・シャルダンという人がいます。この人は二〇世紀初めの人で、非常に先進的

な考えを持っていました。北京原人の研究をやっていたイエズス会の修道士なのですが、キリスト教的進化論という文明の発展の指針があり、それを見極めながら私たちは進んでいくべきだと言われたのです。私たちは今、どこに進んでいったらいいかということを見失っている状態で、前に進んでいるのだと思います。

ですから、ここからは幼稚園の園長としてですが、子どもたちにはどのような社会を作っていくとか、私たちはどのようにして生きていくかというビジョンを示さないと、ただ育てて社会の中に放り込み、あとは自分で生きなさいということ、これから先、本当に良い社会が作られるのか。ただ単に、昔よく進化論が批判されたときの弱肉強食や優勝劣敗が自然の法則だというようになってしまったら、行き着く先は本当に真っ暗です。子どもたちが大きくなったら、ほしくないと思うような社会になってしまふ。子どもたちを喜んで送り出せるような社会にするためには、やはり私たち大人がビジョンを示すべきだと考えます。

細胞の不思議な営み

中井——ここで技術論に戻りたいのですが、例えば脳の細

胞が破壊されても、他の細胞でそれを補うという不思議な命の営みがあるだろうと思うのですが、その技術のありようについて、一言石川先生にコメントしていただきたいと思っています。

石川——脳死は死なのかという問題と結びついてくるのですが、一〇歳までの子どもは大人と違って、言葉を扱う脳の領域が破壊されても、再び話せるようになるということは昔から知られていました。これは、機能が未成熟な段階では脳の別の部分が破壊された言語機能を司ってまた働きたためだと考えられてきました。脳細胞は再生しないと考えられていたからですが、近年脳細胞の再生も起こると言われています。このように技術が進むと新しい事実によって新たな説明も登場するのですが、それ以前の問題として、言葉によってしか科学技術は語れないという科学技術の前提を再考する必要があると思います。

コンピューター言語であろうが、記号であろうが、表現をもつ言葉はすべて、脳の限界をこえたところで、まず人間の精神性が生み出した現象だということです。言葉が先に精神を造ったのではないのです。科学言語も、例外ではありません。科学は、公理の上にしか成立しない世界です。

公理以外のことは、公理を認めさえすればすべて証明可能ですが、公理そのものやそれを形成する言語の問題については手がつけられません。科学用語といえども、客観的中立性を保有してなどおらず、私たちが語る言葉に方向性を与えるムラ気な精神に最後は規定されているのです。聖書に戻れば、「創世記」の中井先生が引用された天地創造神話の前に、もう一つ別の言葉による天地創造の話があります。神の想像（イメージ）した言葉が世界の実体を作るというものです。脳の構造上の論争としてニワトリとタマゴの議論になりかねないのですが、「脳は宇宙より大きいか」と問うと、宇宙を考える脳の方が宇宙より大きいとなるのです。

つまり、科学技術とは本質的に、マインドコントロールの産物なのです。そしてそこに技術の予測不能性の最大の根拠があります。神ならぬ人間のイメージでは、言語が実体化したときに初めて次の言語が生まれてくるので、次の言語の持つ問題まで古い言語では規定できないのです。

中井——どうもありがとうございました。本当はもう少しこちらで議論したいのですが、最初のお約束どおり、会場の皆さまから、ご質問、ご意見、ご感想をお願いしたいと

思います。

フロア——何か深くて、深くて、非常に感動して、何も質問がないです。

中井——言葉にならないほど感動して、というご感想うれしいですね。それでは、そろそろ終わりの方に向かいましょうか。お一人ずつに、最後のまとめの言葉をいただきたいと思います。

まとめ

松田——今日は、西洋と日本の比較の話があまり出ませんでした。石川先生のお話の中ではちらちらと出てきていて、その辺が議論になるかなとも思っていたのですが、やはりヨーロッパとはかなり違いますね。ヨーロッパにおいては、人間というのは非常に特別な存在です。神が創った被造物の中で人間だけは別格なのですが、日本の場合はそのような差がありません。日本では命がかなりフラットで、人間が死ねば牛や馬に生まれ変わるという考え方さえあるほどです。人間と神、人間と動植物は差がないということ、

加藤清正の神社
もありますし、
明治天皇を祭つ
た明治神宮もあ
ります。

最後に、面白
い写真をお見せ

します。図1は高野山の奥
の院にある動物実験の供養
塔です。人間の墓のすぐ隣
に動物の墓が並んでいま
す。さすが高野山という感
じです。

もつと面白いのは、しろ
ありの供養塔です（図2）。
これは、日本しろあり対策

協会という財団法人が建立

したものです。天文学的な数のしろありを絶滅させている
会社の業界団体が、「しろあり、やすらかにねむれ」と願っ
ています。シロアリのご冥福をお祈りしていると思うので
すが、「しろありよ、安らかに眠って、われわれに悪さ・崇



図1 動物実験の供養塔



図2 しろありの供養塔

りをしないでほしい」という意味でもあるでしょう。日本
で最も神聖な場所の一つである高野山の奥の院では、この
ように、人間の墓と動物の墓が隣合わせに立っています。
こうした生命観と、ヨーロッパのキリスト教の生命観はか
なり違うので、その辺のこともやはり頭に置いて考えてい
く必要があると思います。

田島——最後に大きな課題を突きつけられた感じがします。
西洋の神というか、ユダヤ教、キリスト教、あるいはイス
ラム教も、一神教だと言われています。先ほど石川先生も
言われたとおり、アッラーという呼び方もあります。しかし、
ヘブライ語の旧約聖書の中では、実は複数形で神が出てく
るのです。それを一神教の宗教では、神聖なものを表すた
めに複数形で出ているのだという言語学上の解釈をしてい
ます。しかし、もしかしたら別の解釈もできるかもしれま
せん。

それから、キリスト教の神はクリスマスで生まれるイエ
ス・キリストと父なる神と聖霊の三位一体ということを言
うのですが、これも厳密に言えば一神論の中には収まりま
せん。つまり、三つで一つ、一つが三つという考えで、「一
神教はやはり融通が利かない」と言われるけれど、本当は

もつと豊かなものがこの一神教の中にはあるはずだと私は考えていて、それに気付いていないだけなのかもしれないと思っています。

今、大田区宗教者懇話会というグループが東京の大田区にあります。このグループでは、キリスト教、仏教の僧侶、新宗教の方たちがみんなで頭を寄せ合って、池上本門寺で環境問題や慈悲の問題などいろいろなことを話し合ったりするので。宗教の垣根を越えて、そのような形で話し合いを持つというようなチャンネルも最近があります。私もプロテスタントの代表の一人として、それに出ています。宗教者もこのままただ黙って社会の片隅で、昔からあるからというだけの理由で存在し続けるというのでは駄目だと思っっているのです。それがどのように科学技術の現場などに切り込んでいくことができるのかはまだはっきりしないので、宗教者たちも話し合いを持つところとどまっています。ですが、きっとこれから出番があるのではないかと私は考えています。

中井——私も、これからこそ宗教の出番があると思います。

石川——私がマルタで驚いたのは、三位一体の父子聖霊は

すつ飛んで、最後はマリア様（たまにイエス様）という形で、言葉が出てくる点です。ですから、私は確かに形而上的には、西洋と日本は大変な違いがあるように思うのですが、一人の人間がとことん打ち砕かれて、「私は無力で何もできない」と感じたときには、皆同じだと思うのです。それがアッラーであるか、誰であるかということではなくて、自然の前に大いに打ち砕かれて心が開かれたり許されたりすることも含めて、全て同じように思うのです。

裸の人間はわらをもすがר思いで、素直に大いなるものを見る。着物を着て欲を持てば洗脳されるのかもしれない。生き物として、哺乳類としての人間は、群れを作る以上、誰かを頭とあがめたわけです。その頭がナシヨナリズムによる国家なのか、近所付き合いにおける偉い人なのか、あこがれの人なのか、時代は神々と着物を人々に与え続けます。しかし、打ち砕かれて自分一人では動けないときに、私は一体どのようなものを受け入れるか。

私は、このような場ではつい上から目線で考えてしまうのですが、幸いなことに、診察室にいるとほとんど患者さんに圧倒されて、人を治すというよりは、その人たちのたどってきた人生や出会っているものに、ただただ心打ちひしがれてしまいます。とりわけ命を絶とうとしている人の

打ち砕かれ方の素直さの先に会おうと、一緒に大いなるものを感じる以外に何もできなくなります。その時は、マリア様と言うときも、日本の神社で手を合わせるときも、科学技術に頼ってなお生きられると思っている姿から離れて、何もできない弱さからしか歩めないことを覚えます。

今日、子どもたちが人間だけが作った人為的世界だけで生きようになったために、多くの子どもが服を着て裸の自然を拒否するという現象が起こっています。小さいところでは、虫を怖がるということから始まって、あらゆる自然なるものが怖い。人為的な中でしか安心して生きられない。しかし、こういう子どもたちも本当に打ち砕かれて生きようと思ったところから変化し始めます。松田先生の話にありましたが、自然とは私の内にもあるものなのです。いくら着物を着て人為社会に逃げ込んでも、自分から出るうんちも怖い、精液も怖い、人間が出すものすべてが怖い。体臭を消してお化粧をしたり、人工的な香りで武装していなければ、人間臭くて怖い。そのように、人為的な世界に生きたら生きるほど、私たちは私の中にもあり外にもある自然を恐れだしている。今、この恐れが非常に広がっている気がします。

自然恐怖は、文明恐怖への第一歩でもあるのです。その

時代に、私たちが老人としてできることがあるとすれば、自分が生きてきた人生の中で、うまくいった生き方を子どもに示すのではなくて、心砕かれ、どうにもならない一人の弱い人間として、もう一度大いなるものに心を開き、そこにある自然や、そこから啓示されているもつと大いなるものに心を開くための自己修行でしょう。最初に言いましたように、子ども達は石器時代に戻っても生き直せます。希望は、人間だけの社会ではないところに目を開いていくところから始まるのではないかと思います。

中井——どうもありがとうございました。私も非常に感動して、今日の三人の議論で心が揺れて、言葉がうまく出てきません。ですから、今日の議論をまとめることは控えさせていただきたいと思いますが、一言だけお話しして終わらせていただきます。

最後のコメントで石川先生が子どもの話をされましたが、私はこの年になって初めて孫が生まれました。孫を愛するというのは生物学的なあるいは本能的な感情かと思うのですが、子どもの話になると、やはり非常に反応してしまいます。そこで、五〇周年のときに石川先生が話された子どもについてのお話が、ふっと今思い浮かびました。それは、

はいはいをする子どもがまっしぐらに前を向いてはつていく。しかし、ふと不安になって後ろを振り返る。後ろに母親がいれば安心をして、また前に進む。このときの母親と赤ん坊の関係というのは、あるいは人間と大いなる力、これを神と言ってもいいかもしれませんが、その関係に似ているのではないか。私たちが前に進むときに、ふと不安になって振り返って、もし大いなるものをそこに感じることでできれば、私たちはまた安心して未来に向かうことができる。そのような話を思い出しました。

今日、三人のお話に共通するところは、大いなる力ということです。これが神であるか、大自然であるかは別にして、そのようなものと人間はつながって生きていくしかないのではないかということが、一つ共通のメッセージとしてあったと思います。もう一つ印象的なのは、これも石川先生のお言葉だったと思いますが、工業化社会で関係性や循環性が断絶された状態になって、それぞれの人・命が孤立感に陥っています。それを元に戻す方法は幾つかあるかと思いますが、例えば生と死の問題についても、安楽でない、苦しみというものがもちろんあるわけです。極度に苦しい生もあるし、死もある。その他者の安楽でない生と死を引き受け合うことによって、新しい命の道が開かれてくるので

はないかというお話だったかと思っています。私はそのような今も感じています。

私はずっと、今日の中心の話題であった生命倫理の原理とは何なのだろうということを考えていました。それは、次の世代の命に責任を持つということに尽きるのではないかと思います。江戸時代に多く発生した飢饉の中で、特に享保、天明、天保年間に生じたものを三大飢饉と言っていますが、そのひとつ享保の大飢饉では、一〇〇万人が餓死しました。当時の人口が約三〇〇〇万といえますから、大変な大飢饉だったことが分かります。これは主に西日本を中心にして起こった珍しい飢饉なのです。それにかかわって、こんな話が残されています。

現在の四国（愛媛県）の伊予に作兵衛さんというお百姓さんがいたのですが、大飢饉によって奥さんや子どもが次々に亡くなっていきます。その時、作兵衛さんは麦の種を一斗（二〇〜三〇キログラム）持っていたのです。周りの人は「それを食べて、何とか生き延びたいいのではないか」と言うのですが、彼は頑として受け付けず、「自分の命は麦の命に比べると軽い」と言いながら、その一斗の麦の袋を枕にして餓死したというのです。その麦の種は秋にまかれて、多くの麦が生産され、多くの村人たちが救われたとい

う話です。

これは、次の世代の命に責任を持つという生命倫理の一つの形ではないかと思えます。私たちは作兵衛さんのようには必ずしもなれないかもしれませんが、人の苦痛、安楽でない死や生を引き受け合う志は、これから持つて生きなければいけないのではないかということを、今日は強く感じました。どうぞ良きクリスマスを、そして良き新年をお迎えくださいますようお願いして、このシンポジウムは終わりにしたいと思います。今日は本当にありがとうございます。

閉講挨拶

佐藤 博明（静岡大学元学長）

皆さん、こんにちは。先ほど中井先生が会場の皆さんに何かご質問、ご意見というような問い掛けを発したときに、私ははらはらしながら「どなたか発言してくれないかな」と思っていたのですが、「とても何かを言うような状況ではない。それほどお三方の話は圧倒的なものだった」とおっしゃって、皆さんも共感されたと思います。最後の締めのところ、中井先生も同じようなことをおっしゃいました。私も三時間ずっと興奮のし続けど、本当に感動的な時間を過ごさせていただいたと思っております。

それは三人の先生方が、それぞれの専門の立場から研究を深められた成果、あるいは観察の結果を、命をテーマにして縦横に語られた、あるいは深くその事柄を皆さんに披露していただいたからです。まさに各分野の知の匠が、到達した研究の成果を思う存分、皆さんにご披露したということです。これ以上の話は、恐らくどこに行っても聞くことはできないのではないのでしょうか。まさに命をテーマにしながら宇宙の全存在について絵解きをしていただき、私

も興奮し続けの三時間でした。

実はこの講座は一月三〇日から始まり、今日で第六回の最終回です。まずは六〇周年記念ということで企画されたこの公開シンポジウムが、無事このような形で盛会のうちに終わったということをお祝いしたいと思います。一〇年前、私が学長のとき、中井先生にお話いただいて、前半と後半で通算一八回の公開講座を行いました。第一回は一九九八年四月七日、最終回が二〇〇〇年一月一六日です。この期間に一八回の講座を開き、そこに登場した論者は五〇人以上、それぞれの分野での研究をされた知見を、遺憾なく披露していただきました。

前半部分では、二〇世紀というのは何であつたのかということで、自然科学、社会科学、あるいは人文科学の立場からお話をされ、それをまとめた本を『二〇世紀とは、何だったか』というタイトルで静岡新聞社から出していただきました。私は、これをまさに二〇世紀の解剖図だと考えています。それを受けて後半では、これから私たちが足を踏み入れる二一世紀とはどのような時代であろうとしているのか、あるいは、どのような世紀として私たちは期待したいのかということ、それぞれの立場で話していただきます。この二冊目の本の表題は『二一世紀の羅針盤』という

ものですが、私はこれを、私たち人類が二一世紀を歩んでいく一つの見取り図だと考えています。これを一〇年後の今回の講座でもって検証していただきました。その期待に反しない、素晴らしい検証を皆さんにさせていただいたと思っています。

ただ、二一世紀はまだ一〇年しかたっていないので、まだまだ続きます。静岡大学も持続可能な大学を目指し、その中で大学の責任として、二一世紀あるいはその先の世紀まで視野が及ぶような、検証作業や新しい見取り図の作成のために、静大が持っている知のあらゆる力を市民の皆さんに公開していただきたい。四〇年間静大でお世話になったという思いも込めて、このことをぜひ静岡大学にお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

静岡県公開講座ブックレット

生涯学習教育研究センターでは、2008年度より、『公開講座ブックレット』の刊行を開始しました。当センター主催の公開講座の記録を講演録という形でまとめて発行するというものです。

公開講座を実施してそのまま終わりにするのではなく、記録として残し、公開していくことによって、知の蓄積と共有を図ろうと考えています。

これらのブックレットは、静岡大学附属図書館や静岡県内の公共図書館で閲覧することができます。また、静岡大学学術リポジトリ (<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp>) でも公開しています。

静岡大学公開講座ブックレット1

身近な自然環境・里山との付き合い方

富田 昇「里山の性格とその変貌——史資料に見る山林利用の変遷」

小嶋睦雄「海岸林と人の共生関係論」

小南陽亮「里山の自然環境——生態学からみた里山の森林」

[発行日] 2009年3月31日 [頁数] 74ページ

静岡大学公開講座ブックレット2

浜松の戦争遺跡を探る

荒川章二「浜松の陸軍基地」

村瀬隆彦「浜松空襲について」

竹内康人「浜松の戦争遺跡」

[発行日] 2009年11月20日 [頁数] 76ページ

静岡大学公開講座ブックレット3

高齢化社会における地域とまちづくり

中條暁仁「高齢者は弱者なのか? ——「ポジティブな高齢者」像をめざして」

矢野敬一「祭りを継続させる・町屋のまちづくりを立ち上げる——空洞化・高齢化する市内中心部とその存続戦略」

南山浩二「家族・地域社会のゆくえと高齢者介護」

[発行日] 2010年3月20日 [頁数] 72ページ

[バネリスト]

松田 純（静岡大学人文学部教授）

1979年、東北大学大学院文学研究科博士課程・倫理学専攻修了。1995年、文学博士（東北大学）。ドイツ・デュッセルゲン大学哲学部客員研究員（1990-91年）、ボン大学「科学と倫理のための研究所」客員教授（2001年）。専門は、哲学、人間学、生命倫理学。著書に『遺伝子技術の進展と人間の未来——ドイツ生命環境倫理学に学ぶ』（知泉書館、2005年）、『薬剤師のモラルディレンマ』（共編著、南山堂、2010年）など。

田島靖則（日本福音ルーテル教会牧師、雪ヶ谷ルーテル幼稚園園長）

1963年東京都生まれ。立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。米国フィラデルフィア・ルーテル神学校実践神学博士課程修了。九州ルーテル学院大学人文学部助教授を経て2007年より現職。博士（D.Min.）。専門はキリスト教学。キリスト教教育論、キリスト教社会福祉論、キリスト教倫理学の論文多数。

石川憲彦（精神科医）

1946年神戸市生まれ。東京大学医学部卒業。同助手（東大病院小児科・精神科にて臨床に従事）、マルタ大学客員研究員（社会医学的研究）、静岡大学教授（保健管理センター所長）などを経て、現在、林試の森クリニック院長。著書は『治療という幻想』（現代書館）、『子育ての社会学』（朝日新聞社）、『こども心学』『子育ての精神医学』『こどもと出会い別れるまで』（ジャパンマシニスト）、『キレル子と叱りすぎる親』（創成社）など。

[コーディネーター]

中井弘和（静岡大学名誉教授）

1939年福井県生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程中途退学。農学博士（京都大学）。専門は植物育種学。京都大学助手（付属農場）、静岡大学農学部助手、助教授を経て、1989年から教授。静岡大学農学部長（1995-1999年）、静岡大学副学長（2000-2004年）、2005年定年退職。現在、財団法人微生物応用研究所技術顧問、社会福祉法人静岡いのちの電話理事長。著書に『生命（いのち）のかがやき——農学者と4人の対話』（野草社、2006年）ほか。

静岡大学公開講座ブックレット4

いま、再び〈いのち〉を考える

発行日——2012年1月20日

編集・発行——静岡大学生涯学習教育研究センター

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

印刷——株式会社三創

